鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（25）

大隅地区埋蔵文化財分布調査概報

１９８３年３月

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会

序　　文

大隅地区の埋蔵文化財包蔵地の分布調査は昭和50年度から実施しており，第８年次である昭和57年度は，鹿屋・佐多・大根占・根占の１市３町について行いました。

本報告書は本年度の調査で確認された埋蔵文化財包蔵地の外に，以前調査したもので未報告となっているものを合わせて作成しました。大隅地域における今後の文化財保護のために本書を活用していただければ幸いです。

発刊に当たり，調査に御協力いただきました関係市町教育委員会並びに関係者各位に対し深く感謝の意を表します。

昭和58年３月

鹿児島県教育委員会
教育長　井之口　恒　雄

例　言

1．本書は，昭和57年度に実施した大隅地域埋蔵文化財分布調査に，昭和53・54・55年度に実施した分布調査で整理の終了した遺跡分を加えて記載したものである。

2．調査の組織は，本書の調査の経過の中で記した。

3．遺跡，遺物の実測図，写真等は，57年度については長野真一，53年度～55年度分については中村耕治が中心となり一部を立神次郎が分担した。

4．本書で用いた市町の遺跡の番号は任意のものである。

5．本文の遺物番号は挿図及び図版と同一である。

6．本書の執筆および編集は長野・中村が行った。

本　文　目　次

序　文…… 1
例　言…… 2

第１章　調査の経過…… 5

第２章　各市町の遺跡・遺物…… 6
　第１節　佐多町の遺跡・遺物…… 6
　第２節　大根占町の遺跡・遺物…… 14
　第３節　根占町の遺跡・遺物…… 20
　第４節　鹿屋市の遺跡・遺物…… 21
　第５節　吾平町の遺跡・遺物…… 30
　第６節　串良町の遺跡・遺物…… 37
　第７節　高山町の遺跡・遺物…… 46
　第８節　志布志町の遺跡・遺物…… 56

挿　図　目　次

第１図　大泊貝塚…… 6
第２図　大泊貝塚…… 7
第３図　大泊貝塚…… 9
第４図　大泊貝塚…… 10
第５図　大泊貝塚…… 11
第６図　大泊貝塚…… 12
第７図　大泊貝塚…… 14
第８図　宿利原遺跡…… 15
第９図　宿利原遺跡…… 16
第10図　笑喜・宿利原遺跡…… 17
第11図　牧原２遺跡…… 18
第12図　大久保遺跡…… 19
第13図　才原川の下遺跡…… 19
第14図　赤瀬川遺跡…… 20
第15図　野里小西遺跡…… 22
第16図　霧島ヶ丘遺跡…… 24
第17図　伊敷遺跡…… 25
第18図　小浜遺跡…… 27
第19図　上原遺跡出土遺物…… 28
第20図　上原遺跡出土遺物…… 28
第21図　吾平町内の遺物…… 30
第22図　吾平町内の遺物…… 31
第23図　宮ノ上地下式横穴群…… 32
第24図　宮ノ上地下式横穴…… 33
第25図　堀木田原地下式横穴…… 34
第26図　地下式横穴出土鉄器…… 35
第27図　串良町内の遺物…… 37
第28図　串良町内の遺物…… 38
第29図　吉ヶ崎遺跡，住居跡平面図…… 39
第30図　１号住居床面直上出土土器…… 40
第31図　１号住居跡床面直上出土土器…… 41
第32図　１号住居跡覆土内出土土器…… 42
第33図　２号住居跡出土土器…… 42
第34図　１号住居跡出土石器(石鏃)…… 43
第35図　１号住居跡出土石器(石斧)…… 44
第36図　塚崎遺跡出土遺物…… 47
第37図　塚崎遺跡出土遺物…… 48
第38図　塚崎遺跡出土遺物…… 49
第39図　上原遺跡出土遺物…… 50
第40図　下永山遺跡採集石器…… 51

図　版　目　次

図版１－①　笑喜遺跡(骨壺)…… 57
　　②　鹿屋市伊敷遺跡出土遺物…… 57
図版２　鹿屋市伊敷遺跡…… 58
図版３　鹿屋市伊敷遺跡…… 59
図版４－①　串良町上小牧遺跡出土土器…… 60
　　②　高山町塚崎遺跡出土土器

第１章　調査の経過

大隅半島は，早くから多くの遺跡が知られ古代史研究の上で注目されている地域である。とりわけ，河川の発達が著しく，太平洋に流れこむ安楽川・菱田川・肝属川，串良川，また，鹿児島湾へと流れる高須川，神川，万瀬川は，その流域に肥沃な水田地帯を形成している。それらの遺物や遺跡は，古代文化を解明するうえからもきわめて重要である。しかし，このような貴重な遺跡も各地で行われる開発事業の影響から避けることのできない状況にある。鹿児島県では遺跡把握の必要性を重視し，全国遺跡分布調査の一環として，昭和50年度以降文化庁の補助を得，各市町の理解と協力のもとに大隅地域文化財調査計画に基づき分布調査を実施している。今回の調査も，その計画の一環であり昭和57年度事業として下記１市３町について分布調査を実施したものでる。

調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	文化課長	猿渡侯昭	
事務担当	文化課管理係長	川畑栄造	
	文化課　主査	安藤幸次	
	文化課　主事	山下玲子	
調査担当	文化課　主事	長野真一	
	文化課　主事	中島哲郎	（現　鹿児島市教育委員会）

調査は，文化庁全国遺跡分布調査要領に基づき，埋蔵文化財を中心にした悉皆調査に加えて聞きとりによる確認や周知の遺跡の再確認も行った。

本年度は，佐多町，根占町，大根占町と鹿屋市の一部を対象とした。

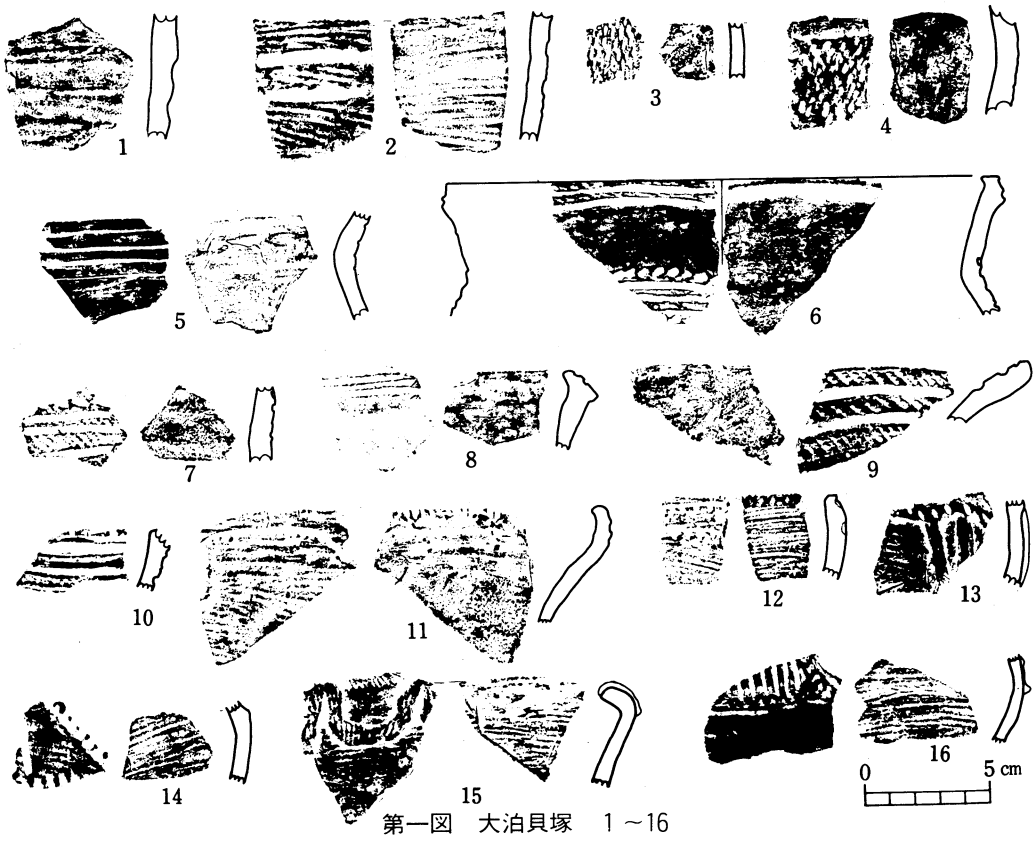
第２章　各市町の遺跡・遺物

第一節　佐多町の遺跡・遺物

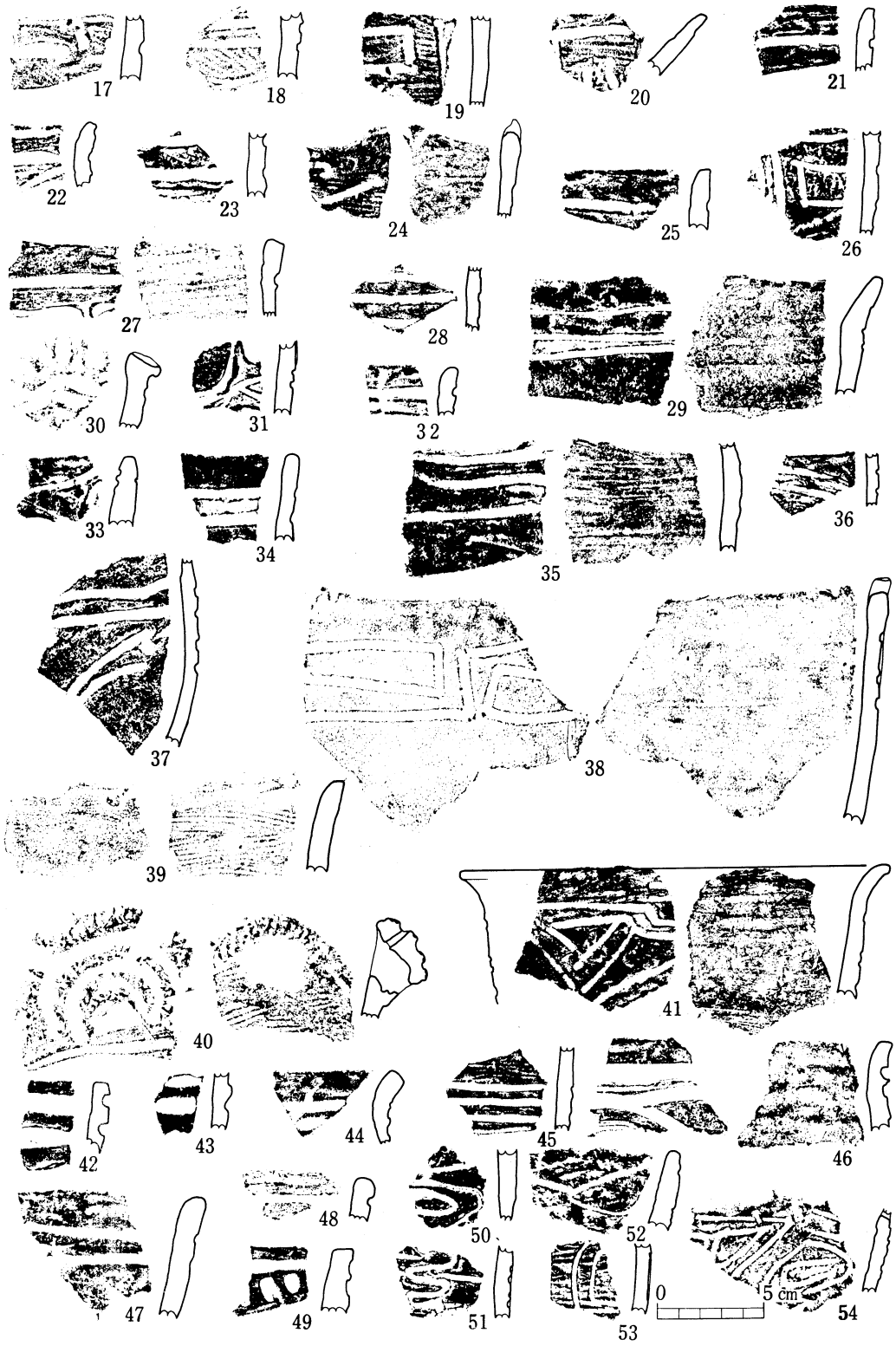
佐多町は大隅半島の最南端に位置し，東側は太平洋に面している。本町を代表する遺跡は，自然の良港大泊港の砂丘地に形成された大泊貝塚で，昭和28年，国分直一氏[註1]（現梅光女学院教授）よにり発掘調査され，縄文時代後期の貝塚であることが知られている。今回の分布調査の際に現状を確認したところ，地区の集団墓地造成により一部が破壊されていることがわかり，露呈した遺物を採集した。その結果貝塚を伴う遺跡地は大泊と外之浦を結ぶ県道を中心とし，南側の砂丘地，北側は集落内を越えた後背地まで広がりその面積はおよそ３～４haに達すると推定される。したがって，集落の各所で遺物の散布が認められるので，地域住民の協力が得られるよう啓蒙すると共に宅地造成等に際しては事前調査がなされるよう配慮する必要がある。

Ⅰ類土器（凹線文土器　１～16）

器面に施される凹線の幅が他のものより広く，１は11㎜，２は７㎜を測る。１は２枚貝による条痕調整の後，ナデ仕上げを行っている。２は二枚貝による条痕調整をなし一見阿高式土器的要素をもつが定かでない。



第一図　大泊貝塚　１～16



第2図　17～54　大　泊　貝　塚

II類土器（縄文，３，４）

単節の回転縄文を施し，３は条痕調整，４はヘラナデ調整による仕上である。

III類土器（西平式系土器，５，８）

内外面共にヘラナデによる入念な整形が行われており，器面に光沢がある。沈線は細く鋭く描かれる。

IV類土器（磨消縄文土器，６，７，９，10）

６は黒色の器面をなし，全体を入念なヘラナデ調整で仕上げている。口縁部はくの字状に外反し，回転縄文を施した後に二条の沈線を廻らし，頸部には連続刺突文が施される。７も６と同様の文様を頸部に施す。９は浅鉢ないしは皿状の器形の土器片で，口唇部に文様をつける。

V類土器（春日式系土器，キャリパー状の器形を呈する土器，11～16）

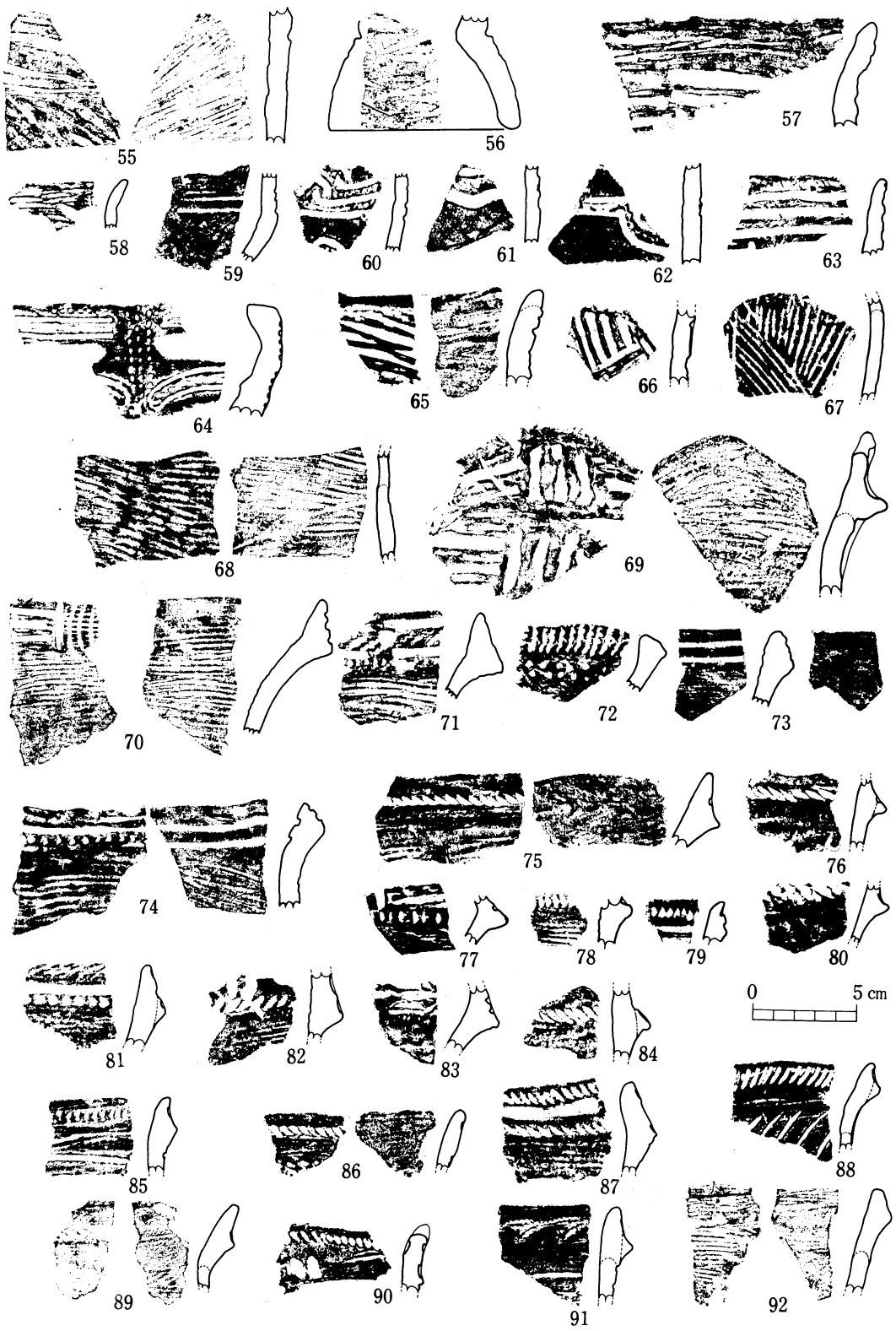
これまでに，この種の土器は鹿児島市春日町遺跡[註2]，山川町成川遺跡等[註3]に出土し，春日式土器と呼ばれ，縄文時代前期の終末に位置づけられている。この一連の土器は二枚貝による条痕調整が共通し，焼成も極めて堅緻である。特に15は口縁部に粘土ひもを貼り付け，粘土帯に縄文を回転し，磨消縄文様の文様構成のあったことがうかがえる。

VI類土器（指宿式土器，17～66，68）

指宿市橋牟礼川遺物包含地の下層出土の土器を標式とするもので，近年多くの遺跡が知られている。ヘラ状施文具による沈線文で文様を構成し，平行線文，曲線文等の組み合せが見られる。器面調整は二枚貝による条痕調整（18，19等），ヘラナデ調整（29，41の内面），条痕調整の後の指頭によるナデ仕上げ（34，37等）等が行われる。ここで注目したい点は，ここの指宿式土器の大半が，指宿地方から直接運び込まれたのではないかと思われることである。指宿地方で採集される指宿式土器は独特の特徴を備えており，その特徴は，同地方で採集される古墳時代の土器まで引きつがれている。まず，きわめて堅緻であること，胎土に多くの砂粒を含み石英，長石等が多く観察され，色調は明るい肌色を呈している。今回採集した指宿式土器も橋牟礼川遺跡，成川遺跡，大渡遺跡等の土器と同様の特色がみられる。このことにより指宿方面より，大泊貝塚に製品として運び込まれたものと考えられる。60，61は二本の平行沈線文間に，貝殻刺突の擬似縄文を施す。64は把手と考えられ，二枚貝による条痕調整の後，指頭によるナデ整形が行われ，光沢のある器面をなしている。文様は平行沈線文と連続刺突文である。文様構成よりVI類土器に含める。

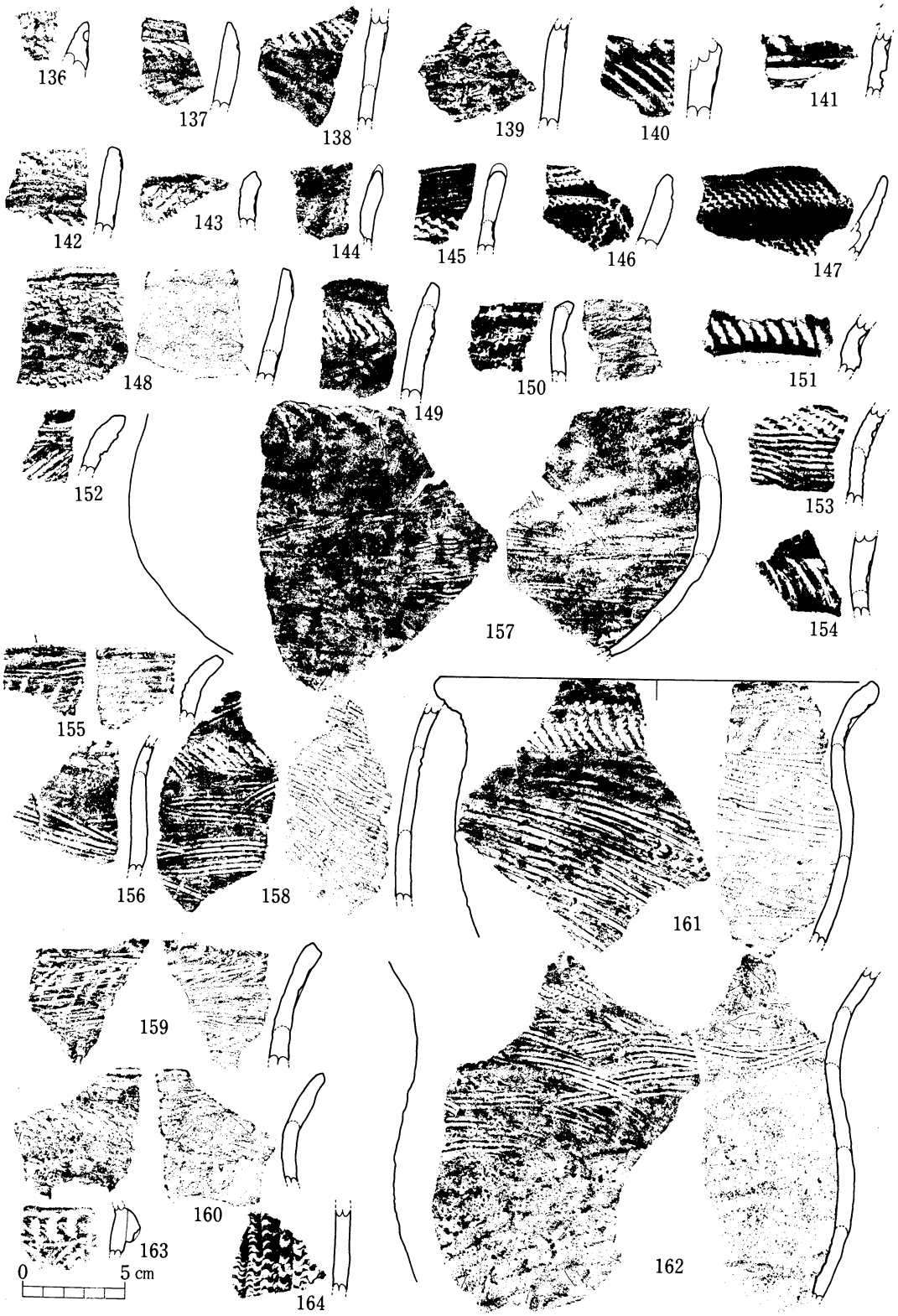
VII類土器（沈線文土器，67）

昭和55年，上屋久町一湊松山遺跡の調査により発見された土器形式で，『器形は深鉢で，胴部が張り，口縁部で外反する。底部は平底である。口縁部は断面が厚い三角形を呈し，上面または外面に文様を施す。文様は狭い文様帯に限られ，胴部に及ぶものは少ない。口縁は平縁と波状口縁があり……』[註4]と形式設定されたものである。さらに口縁部の特徴により数類に分類されている。70，71，77，78，81はA_4類，73はA_2類，72，74はB類，73はA_1類等に，本採集品を分類することができる。70は内外面共に，二枚貝による貝殻条痕調整を行ない，口縁部は内外面

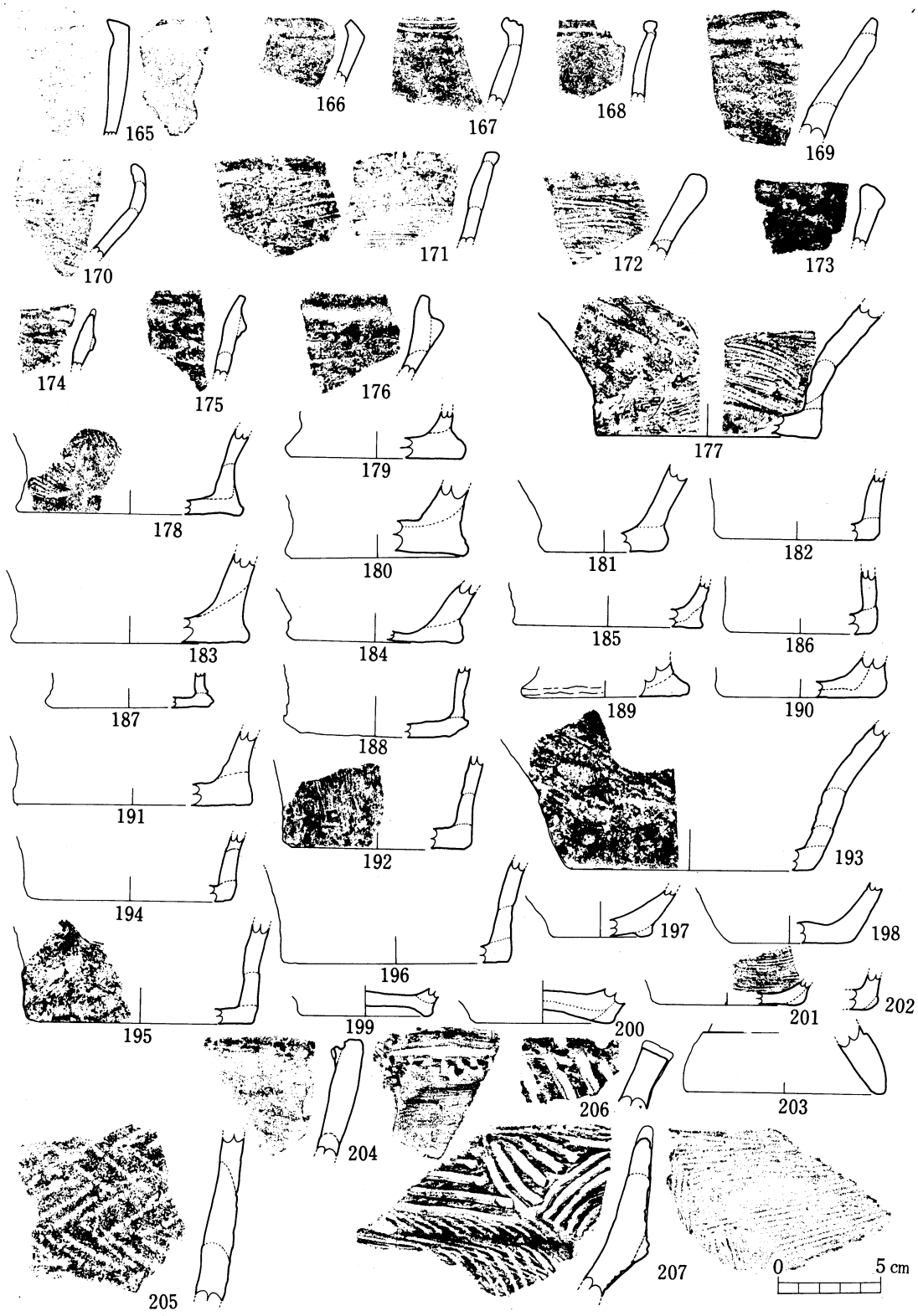


第3図　55～92　大　泊　貝　塚

第4図　93～135　大　泊　貝　塚



第5図　136～162　大　泊　貝　塚



第6図　163～207　大　泊　貝　塚

共に再度ナデによる仕上げを行なっている。文様は貝殻腹縁による縦位の押引文，三本の横位の沈線文（沈線の端部は強い刺突点）中央の沈線には連続の刺突があり，押引文と沈線文を区画する一本の縦位の沈線文が施される。又，注目されることは，土器の胎土，焼成，色調が，一湊松山遺跡出土の土器と極めて類似していることである。

IX類土器（市来式土器A類，75，76，79，80，82～92，105，111，112）

口縁部が三角形に肥厚した土器群で，市来式土器と呼ばれるものである。76，79，82，84，86，87，90，105，110は肥厚した口縁部の文様帯に浅い凹線を廻らしてその上下に爪形状の連続刺突文を施す。このタイプは，笠利町宇宿貝塚にも出土している。75，80，83，88，89，91 92，111，112，116は三角に肥厚した文様帯の幅の狭いもので，Ⅷ類土器に近い形態である。75 86は肥厚した口縁部に爪形状の連続刺突文を，88は同様な手法による斜位の沈線文を口縁と胴部にもつ。85，91は胴部に平行線文と口縁部に貝殻腹縁による押圧文を施す。

X類土器（市来式土器B類，69，93～104，106～109，114～117，119，120，125～127，129，134，174～176，227）

口縁部形態が「く」字形の断面を示すもので93，106等がその特徴をよく現わしている。近年口縁部文様帯がく字形に広く間のびしたものは市来式の中で新しいものとされる。ほとんどが二枚貝による条痕調整で，貝殻腹縁による連続押圧文が三角突起部を狭んで施される。

XI類土器（草野式土器，121～125，128，130～132，134～162，169，171，172）

草野式土器は，128，161等に代表されるものでX類の特徴である口縁部が肥厚することはなくなる。文様は貝殻腹縁による押圧文と沈線文が主となる。器面調整は荒く二枚貝による貝殻条痕調整がほとんどで，157のように貝殻条痕調整後にナデ仕上げを行なった例も認められる。

XII類土器（突帯文土器，163）

協和式土器と呼ばれるものに類似している。1点だけの採集である。

XIII類土器（164）

貝殻復縁を押し引きした文様を持つもので，型式不明。

XIV類土器（内面に文様をもつ，204）

外面はヘラナデ調整の後，ナデ仕上げ，内面はていねいなヘラ調整が行なわれる。内面に小突起をもち，突起には1個の刺突，突起を中心に横位の沈線文，沈線文の下位に連続する刺突文を施す土器で，焼成は縄文後期の土器（指宿式を除く）に類似している。

XV類土器（205）

貝殻腹縁部で鋸歯文状に連続して刺突するもので，西之表市大剝峯遺跡のII c 類土器[註5]に類似するものである。又，九州縦貫自動車道の小山遺跡[註6]でも完成品1点が出土し，石坂式系土器（縄文時代早期）として報告されているが，現時点では若干擬問が残る。今回報告の鹿屋市霧島ケ丘遺跡でも同類のものが見られる。

無文土器（165～176）

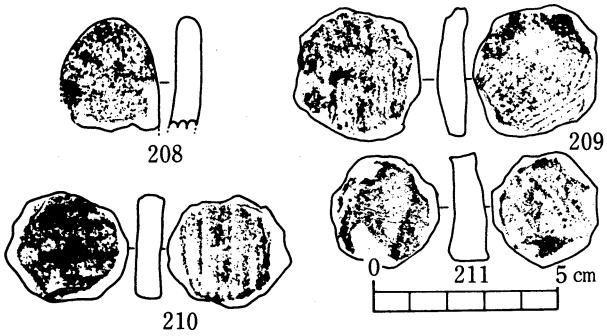
169，171はⅣ類，172はXI類，174，175はX類，176はIX類，173はVII類に帰属すると思われる。170はV類に相当する。その他は移入土器であり，III，Ⅳ類に相当すると思われる。

底部（177～203）

199，200はIII類相当，他は在来系で他の類のものである。

土製加工品（メンコ，208～209）

いづれも土器片を再利用したもので，208は口縁部をそのまま利用している。その他の3例は周囲を削り取り，円盤に造り出している。



第7図　大泊貝塚　208～211

第2節　大根占町の遺跡，遺物

本町は，鹿屋市，吾平町，根占町と境を接し，錦江湾に面した風光明媚な地勢を有している。町内を流れる神ノ川が段丘を形成し，各時代の遺跡25ヵ所が流域に所在している。

皆倉遺跡は，鹿屋市との境界にあり鈴野神社遺跡と密接な関係をもっている。この両遺跡では大量の出土品が見られ，町内でも規模の大きい古墳時代の遺跡と考えられる。また有村遺跡も古墳時代の遺跡があり，水田に取り残された小丘陵に大量の遺物散布が認められる。この遺跡地は，現在の集落内にあり今後の保護のための策を必要とすると思われる。

遺跡の形成上注目されるのは，皆倉遺跡から，中馬場遺跡，○○遺跡，坂ノ上I遺跡，坂ノ上II遺跡と連続して連なる古墳時代の遺跡地であり，それらの遺跡地は共通して錦江湾に面した高台に立地する条件を備えている。このことは，鹿屋市南部の小浜遺跡，平原遺跡，平原上遺跡でも同様であり，当時の社会を考える上で重要な要因と思われる。

町内のほぼ中央部，標高200～230mの高台には縄文時代の遺跡が多く発達し，特に宿利原小中学校の周辺からは多くの遺物が採集される。特に，縄文時代後期の指宿式土器を出す遺跡が多く，今後，遺跡の数，遺跡の面積も増加するものと思われる。

根占町寄りの水田地帯で，砂丘地の内側では，弥生時代中期の祭址遺跡として知られる山之口遺跡[(註7)]があり，現在は，発掘調査の記念碑が立てられている。また，山之口遺跡の南側の傾地長谷では，黒曜石の産地も発見でき，石材の産地として今後の交易研究に貴重な資料と言える。

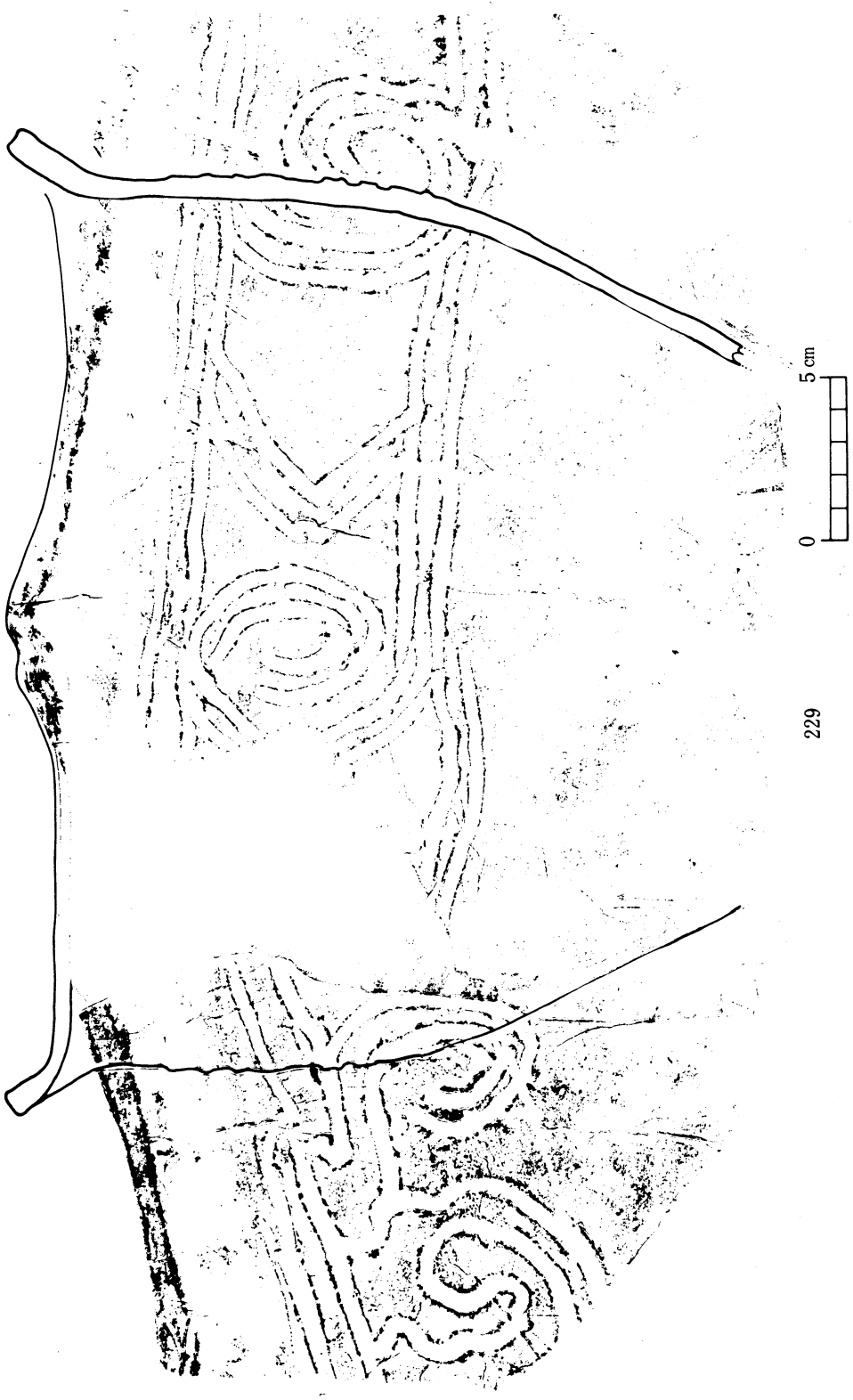
宿利原遺跡　（第8～10図）212～229，231，232

今日の宿利原集落が遺跡地であり，小学校，中学校の造成の折も遺物の出土することが知られていた。附近は，大丘陵の連続して連なる一帯で，畑地として利用され，サツマ芋，タバコ等の生産地である。

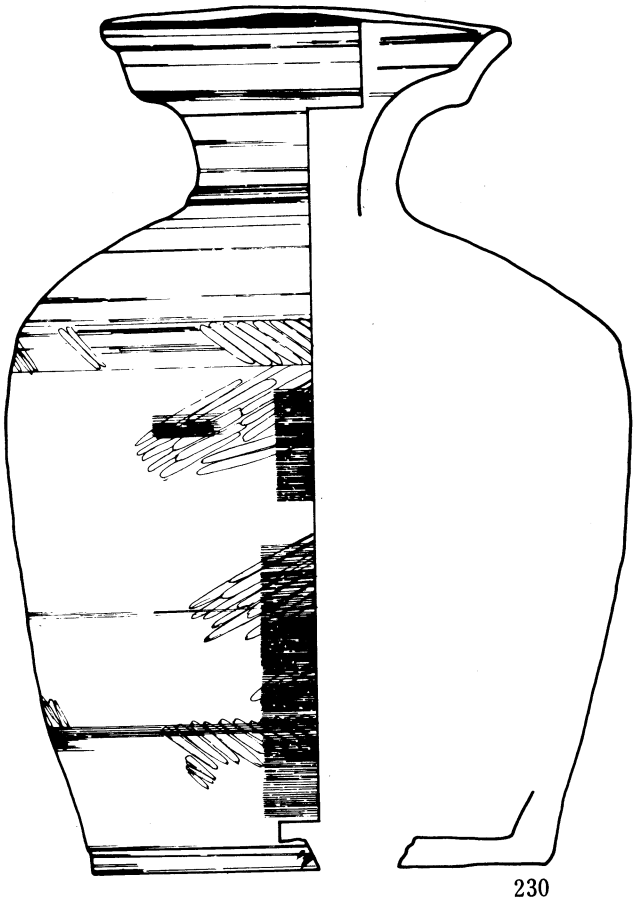
出土品は，指宿式土器を主体とした縄文時代後期のもので，一部は宿利原小学校に保管されている。

212～219等は，ヘラ状工具によりやや太めの凹線文様を描くもので，直線による平行線，曲線による平行線等が施される。220，226等は鋭いヘラ状の工具が用いられ，文様も鋭く，226

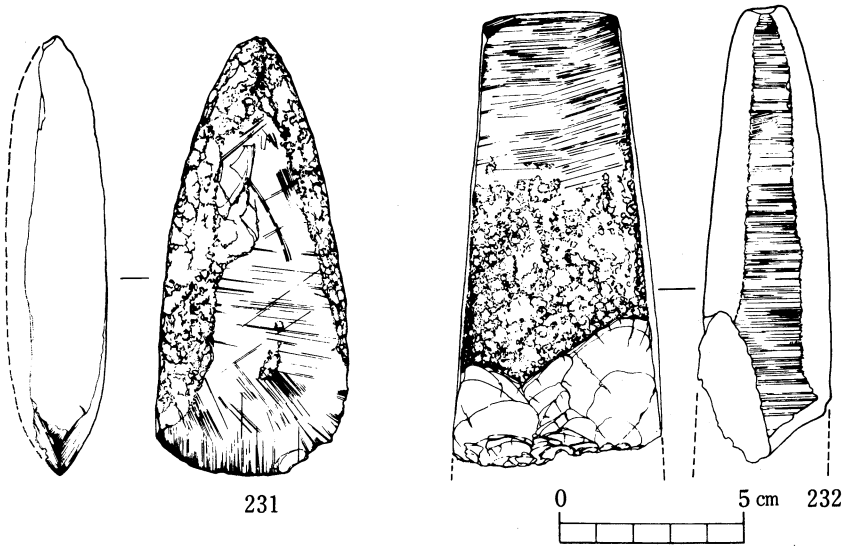
第8図　212～228　宿　利　原　遺　跡



第9図 宿 利 原 遺 跡



230



第10図　230～232　笑喜(230)宿利原遺跡 231・232

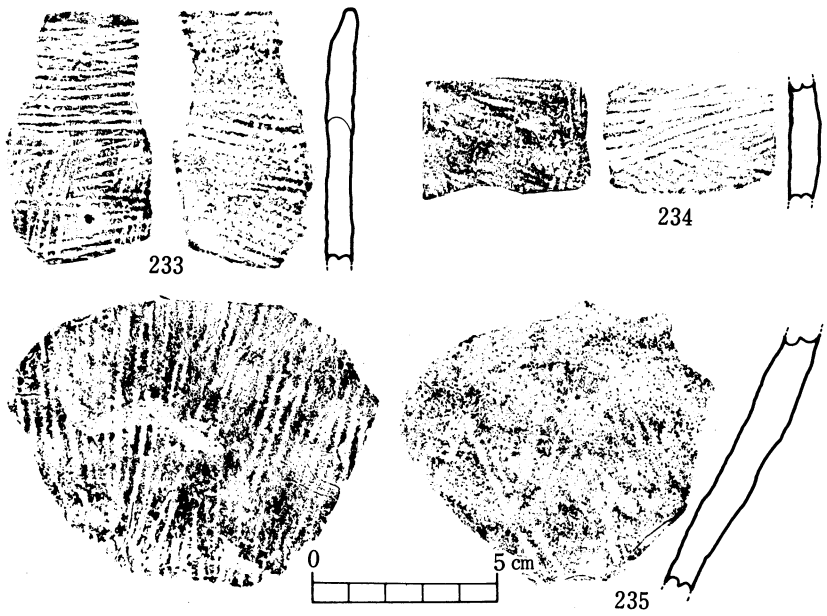
等は入念な沈線文様が施されている。226は，口唇部にも一本の沈線が描かれ，突起が付けられ中央部は窪み８個の刺突点がみられる。221，228は，指宿式土器文化の中にみられる凝似縄文土器で，基本的に二本の平行して施される沈線（凹線）の間に，貝殻刺突文により磨消縄文風に施されるものである。225は綱代の圧痕をもつもので１対３の割で編み込まれている。229は，頸部より口縁にかけて「く」の字状に外反する鉢形土器で，口縁部に４個の山形突起をもち口唇部は外開きとなる。文様は平行して横走する上下２本の沈線文とそれら沈線文間に「く」の字状のうず巻き文とで構成している。231，232は採集した石斧で，これまでの縄文時代後期の土器片に共伴するものと思われる。２点とも硬質砂岩製で敲打技法により整形した後，部分的に磨製したものである。

瓶（骨壺）230

宿利原中学校に保管されていた資料で，中学生が採集したものである。笑喜の谷間とのことであるがその出土地を明確にすることはできなかった。口径11.0cm，高さ23.5cmの赤色の須恵器で，平行線叩きで整形し，ナデ消している。この形態は肥後の須恵器編表の第Ⅷ様式に(註8)相当するもので，九世紀頃，平安時代初期のものと思われる。

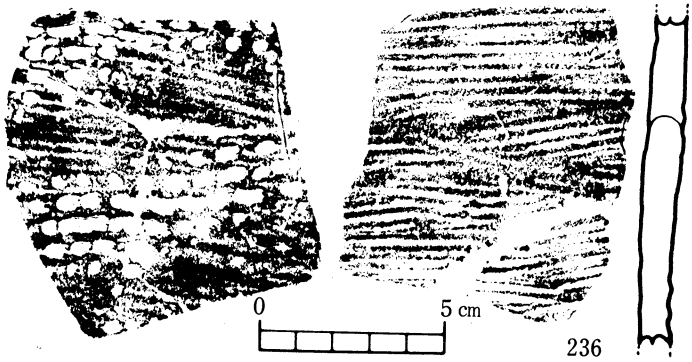
牧原２遺跡　（第11図，233～235）

宿利原の西方，宿利原と高尾を結ぶ道路を狭んだ一帯の畑地で縄文時代後期の遺跡である。233は，内外面ともに貝殻条痕の著しいもので，外面の条痕は，口縁部付近では横，それ以下では縦，横に不規則に施されている。焼成は堅緻である。235は底部に近い部分の破片で内面は風化が激しく観察は困難である。外面は縦位の貝殻条痕が著しい。胎土は多くの砂粒を含みザラザラしている。これらの他に叩石等も採集している。　この遺跡は，露頭観察のできる所であり，火山炭と遺物の相関関係の分かる所でもある。



第11図　牧原２遺跡

大久保遺跡　（第12図）236



第12図　大久保遺跡

宿利原集落より牧原2遺跡を経て大久保へ入る新設の道路壁面より採集したもので，アカホヤ火山灰よりも下位の粘質土層に含まれていた。

内面は貝殻条痕文が見られ，外面は，貝殻条痕整形の後，貝殻による押引き文が施されている後に紹介する根占町赤瀬川採集の238等に類似し，縄文時代早期の遺物と思われる。

才原川の下遺跡　（第13図）237

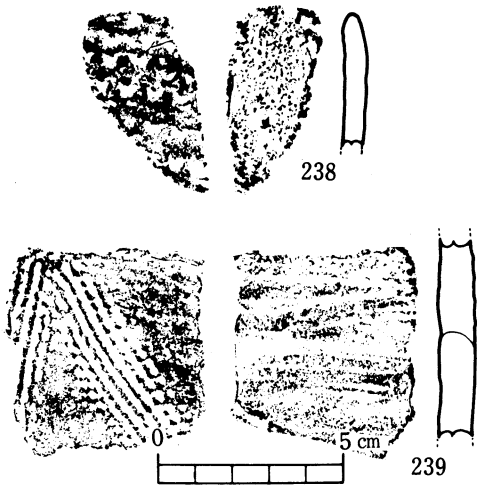
口径26.5cmの浅鉢形土器で，頸部に二条の沈線を巡らしている。器面調整はヘラの横ナデ技法がみられ，光沢のある仕上がりとなっている。この遺物の他，打製の不定形石器も採集されている。

第13図　才原川の下遺跡

註1. 国分直一「鹿児島県肝属郡佐多町大泊遺跡」日本考古学年報6 日本考古学協会編纂 1963年
2. 河口貞徳，河野治雄「鹿児島市春日町遺跡発掘調査報告」鹿児島県考古学会紀要第4号 鹿児島県考古学会編 1955年
3. 昭和55，56年度に成川バイパス工事に伴ない県教委で発掘調査を実施し，現在報告書の作成中である。
4. 出口浩，繁昌正幸「一湊松山遺跡」「上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書」上屋久町教育委員会 1981年
5. 新東晃一，立神次郎「下剥峯遺跡」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書」西之表市教育委員会 1978年

第３節　根占町の遺跡・遺物

根占町では，24ヶ所の遺跡が確認できている。町内では，国見城を始めとし，富田城，山田城等の中世から近世にかけての史跡が多く，板碑等も散見できる。国見城は，大根占町との境界をなし，溶結凝灰岩が浸食されて取り残された懸涯の地にあり，錦江湾を界して薩摩半島を一望する要害の地をなしている。城内には，土塁や空堀りも残っており，さらに，古墳時代の遺物も散布している。花之木Ａ遺跡では，露頭に土拡が観察でき，花之木遺跡へ連結するものと思われるが，雑草や木立のため詳細は範囲がつかめていない。富田城跡は，現在シラスの採掘事業が進み本丸跡のみをとどめているだけで本来の姿は全く失われている。また，本丸跡の下層には縄文時代・古墳時代の文化層があるものと思われる。八重遺跡は，南・東向の小丘陵に立地した縄文時代後期の遺跡で，林道改修工事に伴って出土し，道路面や壁面に遺物が現われている。柿迫遺跡は，縄文時代と古墳時代の遺物の散布が認められる。古墳時代の遺跡はみかん園になっている。また，この柿迫集落では古くより遺物が大量に出土することが語り伝えられているが，数回の踏査，聞き取り調査のかいもなくその所在を確認するにいたらなかった。赤瀬川遺跡は，縄文時代早期の遺物を出土している。赤瀬川は，町内唯一の河川である雄川の一支流で，多くの段丘を形成し遺跡立地の好条件の地勢をなしている。今回の調査では，明確に確認できたのは１ヶ所だけであったが，今後，流域添いに遺跡が発見されるものと思われる。町遺跡は，町役場内の敷地内にあり，古墳時代の遺物が採集できる。雄川の下流域で，はんらん原であることから古墳時代以降の遺跡が密集しているものと思われる場所が，町内で最も人が集った中心地となっており，詳細な情報を提供するにいたっていない。また，今回は町南部（辺田・立神・塩屋・登尾・炭屋・石走等）の一帯は，地勢等を考慮し確認が困難と思われたので実施の対象外とした。



第14図　赤瀬川遺跡出土土器

赤瀬川遺跡（第14図238～239）

赤瀬川の段丘より形成された遺跡で，シラス取りの行われた畑地に散布している。238は，貝殻腹縁による刺突文様をもつ口縁部で，わずかではあるが内向を示す。

砂粉を多く含む胎土である。239も施文具は具殻で押し引き文をもつ。238に比べて焼成はかなりよくなり器面は光沢をもっている。

第４節　鹿屋市の遺跡・遺物

鹿屋市の分布調査は，昭和54年(註9)・56年(註10)に２回実施し，今年度は３年次の調査である。

市内の遺跡は，これまで２年間の調査で62ヵ所知られ，今回の調査でさらに21ヵ所を追加し，83になる。

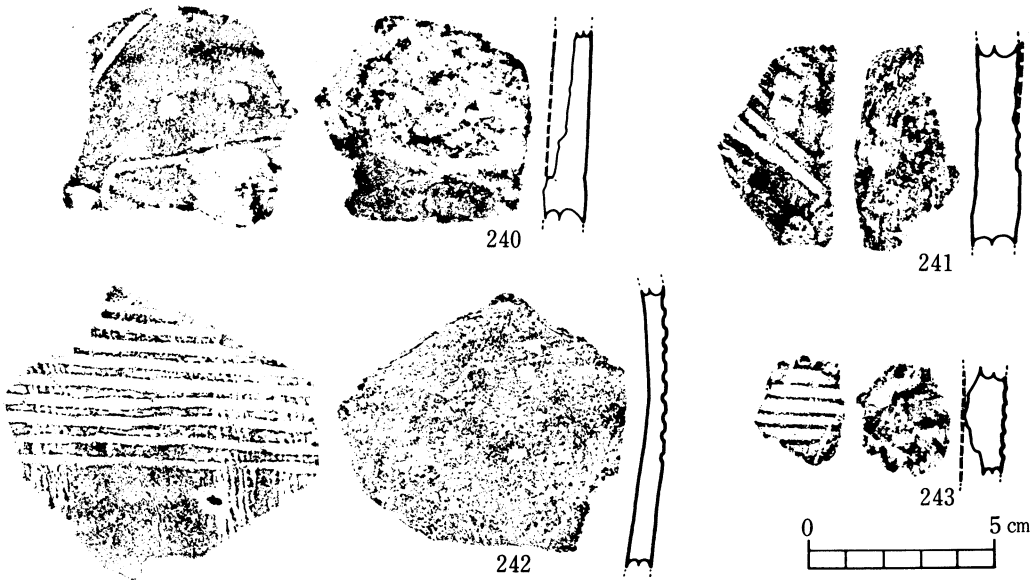
これまでに知られた遺跡を概観するといくつかの遺跡形成の傾向・特長をみることができる。まず市内の中央部を南北に流れる肝属川のつくりだした段丘・丘陵上に連なる遺跡群では，肝属川の左側（西側）に広大な面積をもつ遺跡が形成されている。王子遺跡25，堀之牧遺跡群60，石仏頭遺跡62，大窪遺跡63，上楠原遺跡64等がそれらであり，弥生時代から古墳時代にかけての遺物を採集できる。これらの遺跡は，現在，発掘調査が続けられ弥生時代の住居址が次第に解明されている王子遺跡と類似した様相をもつものと思われる。なお，曽田遺跡67から川東遺跡70・71・72を経て，東田ノ上遺跡22にかけても同様な背景をもつ遺跡が点在している。第２にこの肝属川遺跡群と類似した内容をもつ遺跡群が市内の南部域に広がっている。遺跡の分布する一帯は，東西に流れる大姶良川によって形成された段丘が発達する地域で，遺跡もこれらの段丘を利用してつくられている。飯隅町・南町・獅子目町・田渕町・大姶良町に数多く密集がみられる。これらの遺跡では，縄文時代，弥生時代，古墳時代，歴史時代の全時代に生活の舞台となり重複する遺跡が多く，安定した自然条件が遺跡の形成に役立ったものと思われる。
この中で特筆すべきは，伊敷遺跡31で，１万年以前と考えられる黒褐色ローム層（BBI）の中より隆帯文土器が出土することであり，土器発生の問題に一石を投じている。第３は，海岸線添いに点在するもので，錦江湾を足下に見下す高台に遺跡が形成されている。小浜遺跡57・平原遺跡58・平原上遺跡59・下西原遺跡18・掛平遺跡19・枯木ヶ尾遺跡26・早川遺跡27と連続して存在している。これらは，ほぼ古墳時代の遺物を産出する遺跡であり，一遺跡の占める面積も広大で遺物の出土量も大量である。このような遺跡のあり方は，大根占町でも同様で，この種の遺跡を高地性集落とする考え方もなされている。第４は，高須川流域に形成される。また，有武町周辺では，道路側壁の露頭等に，層位別に形成の異った遺物の様相を細かく観察できる所もあり，貴重な遺跡が多く存在している。一方，下流域では，小野原町の畑地帯，上野町の水田地帯が開け，それらを利用して古墳時代の遺跡が中心に分布している。最後に，横山町から霧島ヶ丘周辺にかけて点在する遺跡で横山町周辺は，古墳時代の遺跡が広がり，畑地の側道や切り通し面に遺物が層をなし密集している状況を見ることができる。霧島ヶ丘は，鹿屋市全域を遠望できる所で，縄文時代早期の遺跡が広がっている。そのような中で３河川の果した役割は大きい。やがて氾濫原や肥沃な湿地帯も生活の場となり集落址，生産遺跡等の発見されることも考えられる。ちなみに，国道220号のバイパス工事に伴った西抜川遺跡（水田）では，歴史時代，古墳時代の遺物が完全な状態で発見され，近くでは，縄文時代後期の遺物も発見されている。また，白崎町の高付遺跡（水田）でも弥生時代から古墳時代にいたる土器が多数発見され中には完形土器もあると言われている。今後は，水田地帯に注目し遺跡の発見に努める必要があろう。

次に代表的な遺跡について紹介する。

丸岡遺跡　79

古墳時代の集落址と思われ，農道拡幅工事の時に一部が削り取られ，大量の遺物が散乱している。古墳時代の遺物（通称成川式土器）が道路面や壁面にみられ，また，住居址と思われる遺構や，溝状遺構等も確認されている。同遺跡の西側寄りの所では，製鉄址らしき遺構もあり，ふいごや鉄宰等が採集されている。平安時代と思われる土器片もみつかっている。

野里小西遺跡　74（第15図240～243）



第15図　野里小西遺跡　240～243

鹿屋市立野里小学校と自衛隊（鹿屋航空隊）との間の畑地で，近年宅地造成の進行している所である。これらの遺物も，造成のために土取りの行われた後地の壁面より採集したもので，アカホヤ火山灰層直下の粘質のローム層に含まれていた。

240の形式は不明で,文様は沈線文と連点文が施される。241と243は貝殻条痕文が施された赤褐色の土器片で，石坂式土器に類似している。244は塞之神式土器[註11]で胎土に砂粒を多く含んでいる。色調は灰褐色を呈し横走する沈線文に撚糸文を直交し文様を構成している。

註11　河口貞徳「塞之神式土器」『鹿児島考古学第６号』鹿児島県考古学会1972年
新東晃一「塞之神式土器」『縄文文化の研究３ —縄文土器Ⅰ—』雄山閣出版株式会社1982年
この塞之神式土器は，河口貞徳が塞之神Ａｂ式土器と呼ぶもので，近年，新東晃一が塞之神Ⅲ式土器と呼んでいるものと同一であり，縄文時代早期の遺物である。

霧島ヶ丘遺跡83（第16図　244～258）

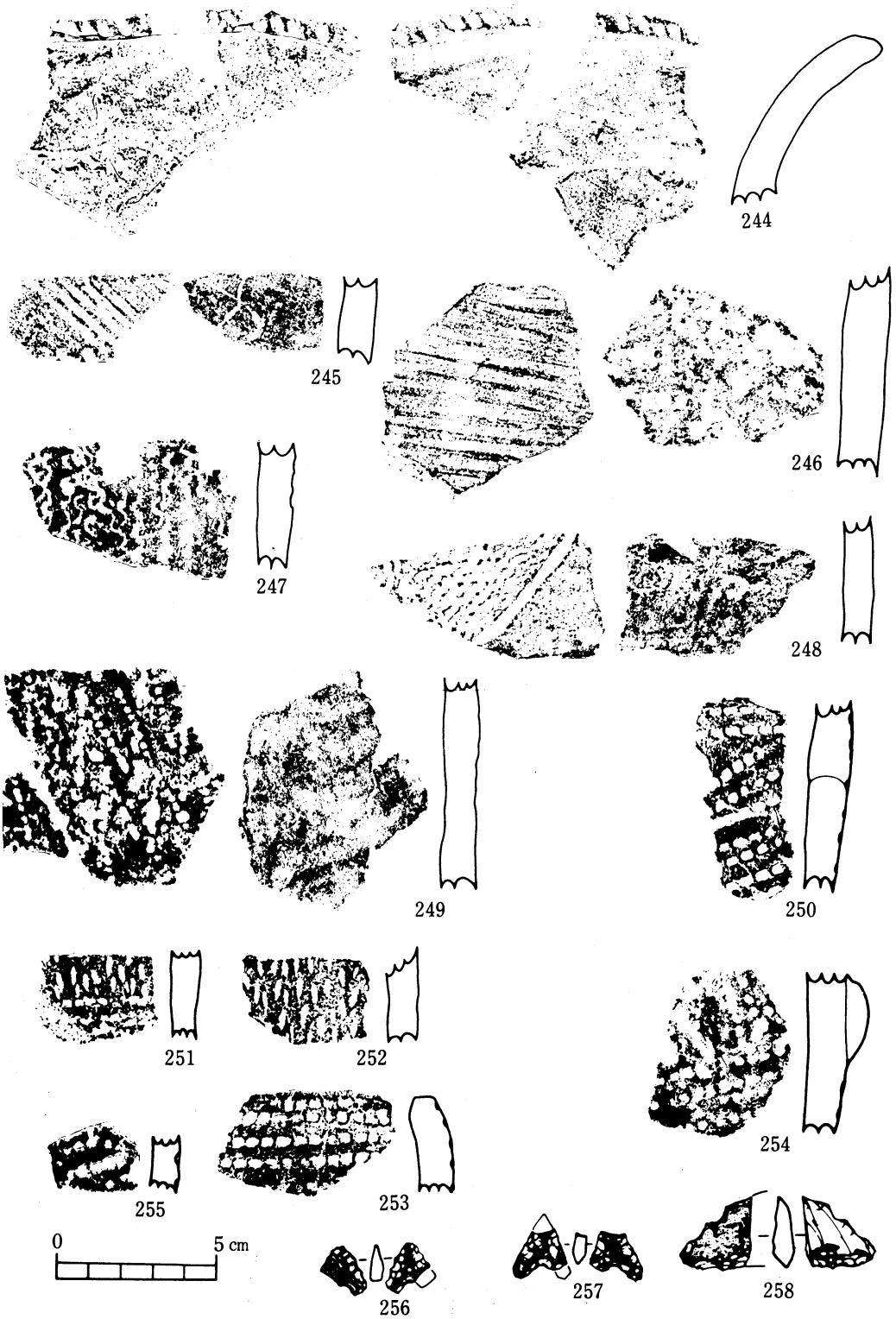
遺物を採集できるのは，現在，市の運動公園の中であり，公園造成により一部を破壊したものとみられる。この種の遺跡は，かなり広範囲に広がることも考えられる。周辺の防風林帯や畑地の下に埋れていることも推定される。244～246は，石坂式土器片で，口縁部が大きく外反し，口唇部には連続した浅い刻みが施されている。また口縁部には，二枚貝の腹縁部による刺突文が施される。247は，吉田式土器で，胎土に多量の金雲母を含んでいる。内面はナデ調整がなされている。248は，塞之神Ａａ式土器で胎土に多くの砂粒を含み，焼成は良く赤褐色の表面を呈している。249は，西之表市下剝峯遺跡のＩＩｃ類と同種の土器で，貝殻刺突により鋸歯状文を描いている。胎土は247の吉田式と同様金雲母を多量に含みもろくなっている。250，253～255も貝殻刺突文土器である。特に254は瘤状突起がみられる。なお，251，252の文様は，ヘラ状工具で刺突されたもので爪形文風の文様となっている。これら６個の破片は２個体分のものと思われ，焼成が極めて良く灰黒褐色で堅ろうである。

伊敷遺跡31（第17図　259～278）

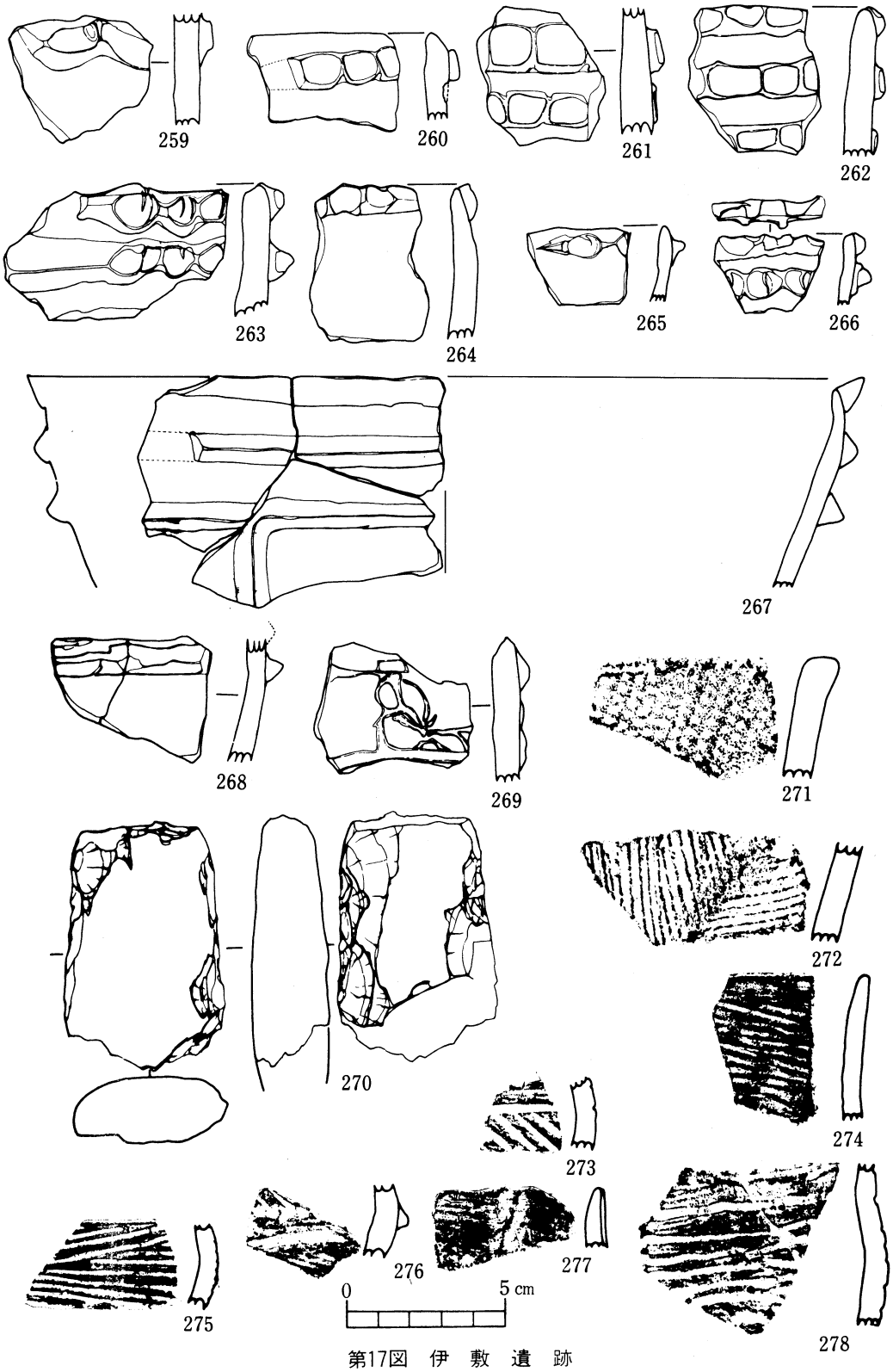
伊敷遺跡は昭和53年に確認調査が行われた遺跡で層位はＩ層・灰黒色土(耕作土)，ＩＩ層・黒色火山灰土，ＩＩＩ層・茶褐色土，ＩＩＩ層上部には部分的に紫色の膠結コラ（開聞岳）が見られる。また，ＩＩＩ層中には軽石が含まれるが，下部は軽石の量が多くなる。Ⅳ層・黄色軽石，Ⅴ層・黒茶褐色粘土，Ⅵ層・赤黄褐色パミス，Ⅶ層・乳褐色粘質土，Ⅷ層・黒褐色土(パミスを含む)，Ⅸ層・暗茶褐色粘質土，Ⅹ層，赤褐色軽石(大隅降下軽石)が観察される。Ⅳ層の軽石は池田カルデラ起源で約4600年前，Ⅵ層はアカホヤと呼ばれるもので喜界カルデラ起源で約6000年前・Ⅷ層中のパミスは桜島起源で約10,000年前，Ⅹ層の軽石は姶良カルデラ起源で約20,000年以上前と想定されている。遺物は，ＩＩＩ層上部に弥生時代中期・古墳時代の成川式土器・土師式土器。ＩＩＩ層中部に縄文時代後期～晩期。Ⅴ層中に縄文時代前期（型式不明）と思われる土器片と炭化物の多く含まれた集石（礫群）が検出される。Ⅶ層中より縄文時代早期の土器片と集石。Ⅸ層中に隆帯文土器、石斧が見られる。

259～270まではⅨ層より出土したもので，隆帯文系の土器片[(註12)]と思われる。

これらの隆帯文土器は，一様に，貼り付ける隆帯（粘土紐）が大きいため，隆帯部の剝脱したものもみられる。隆帯は大きなもので約２cmであり，259～262は，隆帯の上に指頭で押しつけ凹面を形成している。263～266でも同様であるが，指頭圧痕の際に爪痕も同時に押しつけられている。267と268は，三角の粘土帯の貼り付けであり，269は小さな粘土帯を貼り付けている。265と266は焼成が極めて良く灰褐色を呈し堅ろうである。他の土器片は，赤褐色でもろく剝脱が激しい。270は，泥岩を用いた石斧で風化が激しく，磨製石斧的な様相を呈しているが明らかな観察はできない。271・272は，Ⅶ層（乳褐色粘質火山灰土）より出土したもので，石坂式土器と思われる。273～278は，Ⅴ層（黒茶褐色粘質土）より出土したもので，炭化物を多く含む集石もある。278を除いてほぼ同類の土器片と思われる。274は口縁部で，やや外反する口縁部をなす鉢形土器で，内外面ともに貝殻条痕が著しい。275は沈線の組み合わせ文様をもつもの



第16図　霧　島　ヶ　丘　遺　跡


259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
0
5 cm

第17図　伊　敷　遺　跡

で，276・277と同一個体と思われ，沈線文と隆帯の組み合わせ文様をもつものである。278も沈線文様の土器であるが，他とはやや異なり焼成もやや軟質である。これまでにこれらと同一の土器は発見されておらず型式は不明で，その帰属は明らかでないが層位的条件，土器の成形手段などより縄文時代前期に位置すると思われる。

当遺跡は，遺物の層位的な関連がよく現われており重要な遺跡である。

註12. 本県を中心として南九州に特有に見られる土器で，昭和37年河口貞徳により宮崎県串間市大平遺跡で発見されたのが始まりである。その後，本遺跡を含め，瀬戸口望により曽於郡志布志町東黒土田遺跡，鎌石橋遺跡でも数点出土している。これら4遺跡で共通していることは，出土する層位が約1万年以前と推定される桜島火山灰よりも下位のローム層である。このローム層は，本県では，細石器を主体とする文化層でもあり発生期の土器として近年注目されているものである。
瀬戸口望「東黒土田遺跡」『鹿児島考古第15号』鹿児島県考古学会　1981年。
河口貞徳・峯崎幸清・上田耕「鎌石橋遺跡」『鹿児島考古第16号』鹿児島県考古学会　1982年。

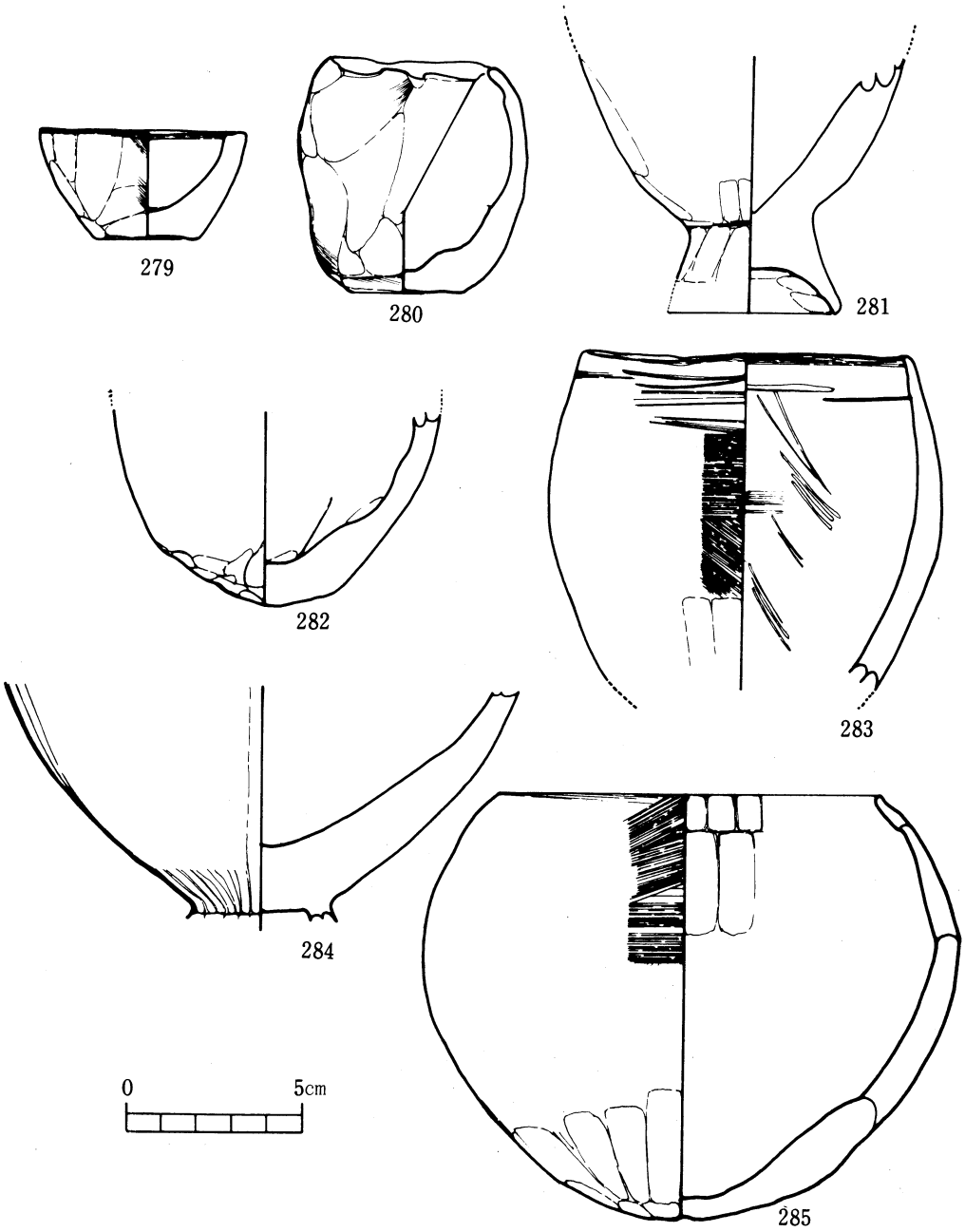
小浜遺跡（第18図）

昨年報告した浜田町小浜遺跡で採集された遺物で耕作者が所有していたものを借用して紹介した。大根占町とを結ぶ国道269号線を足下に見下す高台の畑地にあり，錦江湾につき出した高台に立地している。

279は口縁径が5.9cm，高さが3.1cmを測る手捏ねの小形鉢である。口唇部は平坦面をなす。安定した平底より口縁部へ直行する厚手の土器である。内面はヘラナデ，外面には指圧痕が認められる。280は，口縁径4.8cm，高さ6.6cmの小形壺形土器でやはり手捏土器である。無頸壺で安定した平底で，口縁部に向かい内湾し口縁は狭くなく丸く終っている。内外面ともにユビナデである。281，小形甕形土器で，脚台が付けられ内面はヘラナデ，外面もヘラナデである。282，小形壺形土器で，内外面ともヘラナデで，底部は丸底で凹凸がみられ整形は雑である。胴部も最も張り出した部分に若干の凹みがあり貼り付け突帯のつく可能性もある。283は鉢形土器で，外面の上半部はヘラの横ナデ，下半部は縦ナデ，内面は繊維状のハケナデである。胴部中央から内湾しながら口縁部へ真直にのびる器形である。284は台付の鉢形土器で，外面は縦方向のヘラナデ，内面はヘラナデで，器形はいくぶん丸味をおびて強く開きながら口縁部につづく形を呈している。脚台は，貼り付けによってつくられる。285，丸底の無頸壺形土器で，最大径が上半部にある。やや球形を呈し，最大径の部分で接合している。内面は縦方向のヘラナデ，外面はヘラナデで，底部に竹状の圧痕がつく。

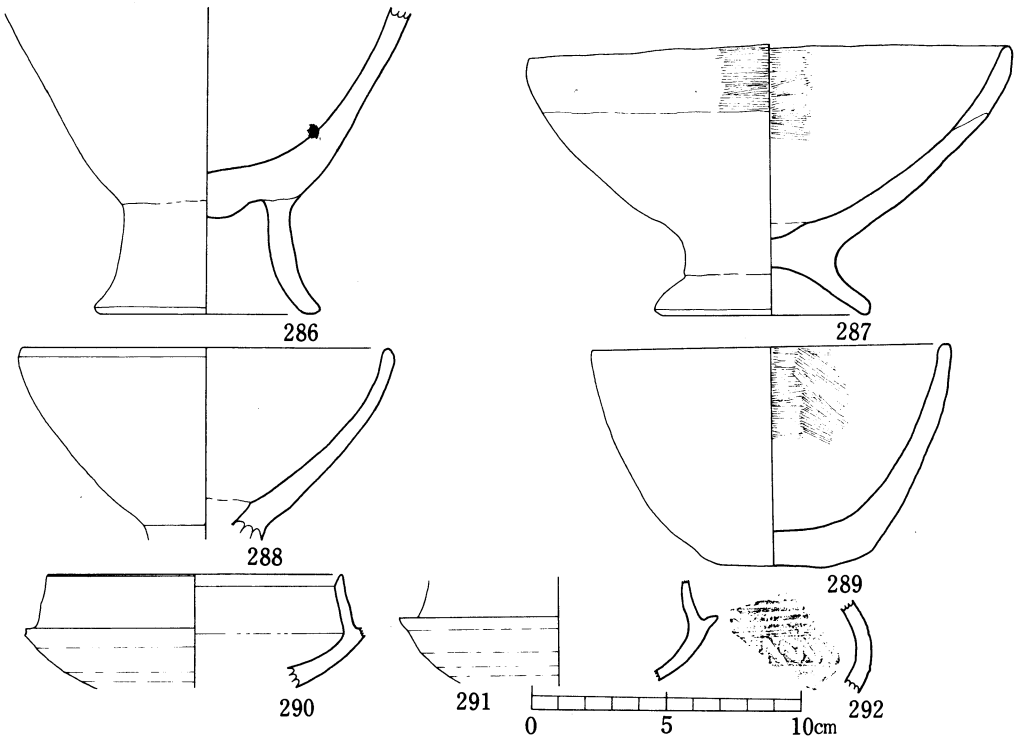
上原遺跡（第19・20図）

上原遺跡は55年度に確認調査を行なった遺跡である。古墳時代の遺物が主に出土し，住居址らしい遺構も見られた。286は甕形土器であげ底の脚台を有する。287はやや浅いあげ底の脚台を有する鉢形土器である。大きく外反して立ちあがり，口縁端部は若干内湾する。外面は全面に丹と思われる赤色顔料を塗布する。288は高坏の坏部と思われる。口縁部はやや内湾し，外面



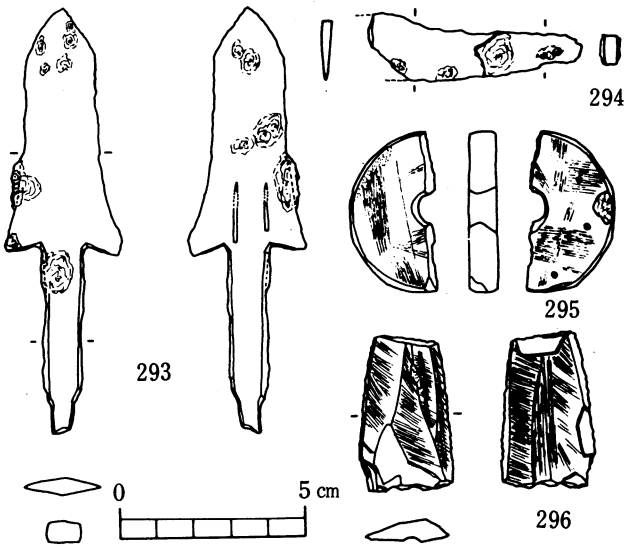
第18図　小　浜　遺　跡

は全面に丹と思われる赤色顔料を塗布する。289は鉢型土器，平底の底部から直行に近く立ちあがるものである。286～289は成川式と言われているものである。290～292は須恵器である。290は坏で，口縁部はやや内傾し，端部内面に稜を有する。291は坏で口縁部はやや内傾し，端部は欠損する。受け部はわずかに上方へのび，端部は鋭くおさめる。292は壺か瓮の胴部と思われる。胴部最大径の位置に櫛描波状文を施す。



第19図　上原遺跡出土遺物

293は全長11.5cmを測る鉄鏃である。茎の断面は長方形でいわゆる平根式である。身は長三角形を呈し，峰が尖がり逆刺を有するものである。294は刀子の一部と思われる。295は紡錘車の半分と思われる石製品である。直径は4.4cm，巾0.7cmで中央に約0.8cmの穿孔を有する。296は磨製石鏃で先端部を欠損するものである。基部は推定で2.7cmを測り，二ヶ所に幅0.4cmの快りが見られる。又片面に幅0.5～0.3cm，長さ3cmの溝を有する。296は弥生時代の所産であろう。286～289は成川式系の土器で古墳時代のものと思われる。290～292はやや古いタイプの須恵器で，5世紀末から6世紀初め頃のものと思われる。293，294の鉄器も古墳時代に属するものと思われる。



第20図　上原遺跡出土遺物

鹿　屋　市

	遺跡名	備考
1	本坊	古・弥・縄
2	島元	古・弥
3	上原	古・弥
4	松尾	歴・古・弥
5	岡ノ前	歴・古
6	飯隅	古・弥
7	小牧	弥
8	菖蒲	古・弥
9	暮小牧	古・弥・縄
10	田渕上	古・縄
11	茶園ノ上	古・縄
12	藤崎	縄
13	瀬筒原	歴・古・弥
14	小永崎	歴・古・弥
15	永崎	歴・古・弥・縄
16	山神	縄
17	諏訪尾	古・縄
18	下西原	歴・古・弥
19	掛平	歴・古・弥
20	湯穴ノ上	古・弥
21	笹ヶ尾	弥
22	東田ノ上	古・弥
23	早馬原	歴・古・弥
24	中牧	歴・弥
25	王子	歴・弥
26	枯木ヶ尾	古・弥
27	早山	古
28	俣刈	古・縄
29	池ノ迫	古・弥
30	鎮守ヶ迫	古・弥・縄
31	伊敷	弥・縄
32	芝原	古

	遺跡名	備考
33	山外森	古
34	中野	古
35	神野牧	縄
36	打馬	古
37	平原古墳	古
38	大浦	縄
39	郷之原	古・縄
40	川の上	古
41	川薄町遺跡群	古・縄
42	芝立	古・縄
43	鶴羽城跡	歴・古
44	古里	古・弥
45	キタバイ	古
46	谷平	古
47	松の岡	古
48	岡元	古
49	老神	歴
50	早馬原B	古
51	浜田小南	古
52	宮の尾	古
53	浜田	古
54	上田原	古
55	本村原	古
56	皆倉	古
57	小浜	古
58	平原	古
59	平原上	古
60	掘之牧遺跡群	古・弥
61	上祓川遺跡群	古・縄
62	石仏頭	古・弥
63	大窪	古・弥
64	上楠原	古

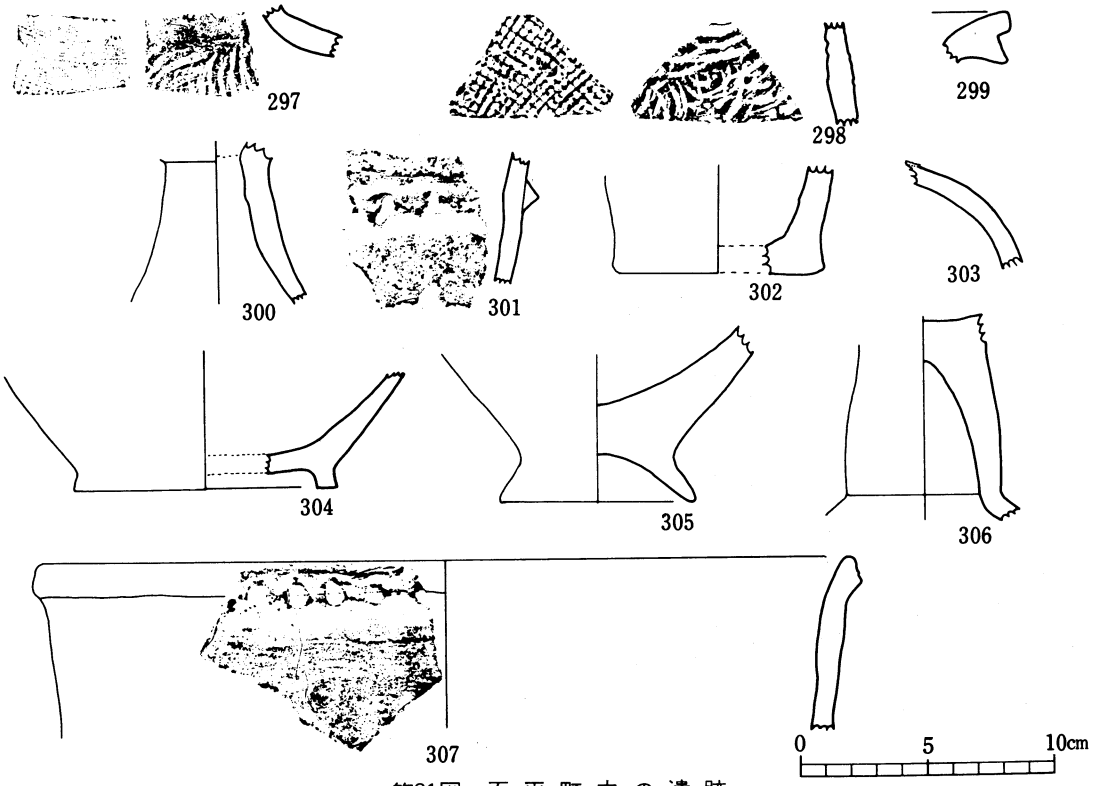
	遺跡名	備考
65	西祓川	古・弥・縄
66	寿三丁目	古
67	曽田	古
68	匂崎	古
69	寿六丁目	古
70	川東1	古
71	川東2	古
72	川東3	古
73	高付	弥・古
74	野里小西	古
75		
76	小野原	歴・古
77		古
78		
79	丸岡	歴・古
80	横山1	古
81	横山2	古
82	横山3	古
83	霧島ヶ丘	縄

歴……歴史時代
古……古墳時代
弥……弥生時代
縄……縄文時代

第５節　吾平町の遺跡・遺物（第21図～第26図）

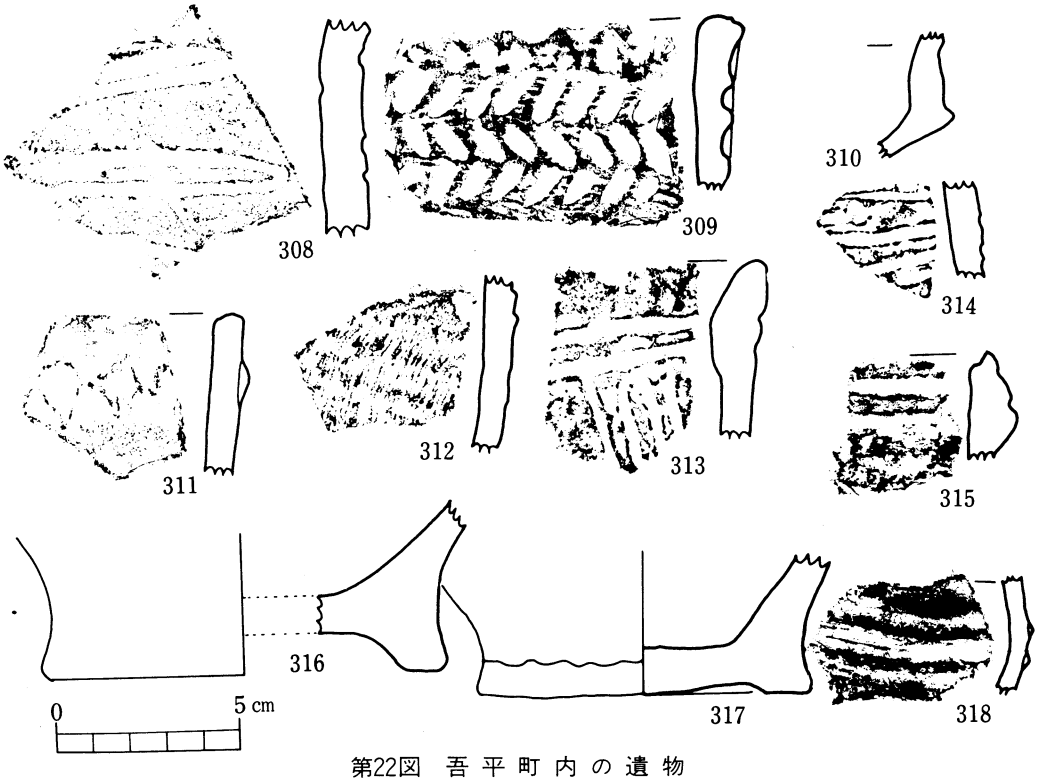
吾平町は大隅半島のほぼ中央南部に位置し，鹿屋市，串良町，高山町，田代町，大根占町と接している。南部は山岳地帯で，姶良川，苫野川，大姶良川等の源となっている。北部には火山灰台地，及び沖積平野が広がり，遺跡立地の好条件を備えている。今までにも縄文時代，，弥生時代，古墳時代の遺跡の他に中世山城等が多く知られている。特に，地下式横穴は天神原地下式横穴群，宮ノ上地下式横穴群等が古くから知られ調査も行われている。表の１～23は最近の分布調査により確認された遺跡，24～60は遺跡地名表より抜き出したものである。

297～299は寺ヶ迫遺跡(51)，297は須恵器で甕の肩部と思われる。298も須恵器で甕 の胴部と思われる。外面は格子目叩き文，内面は青海波叩き文が見られる。299は弥生時代の壺の口縁部で二叉状を呈する。弥生中期と思われる。300，301はモタイ坂遺跡(36)，300は高坏の脚部，301は甕形土器で，刻目突帯を有する。いずれも成川式（古墳時代）と思われる。302は中尾遺跡(７)，縄文式土器の底部である。303は反田原遺跡(５)，須恵器の壺の肩部と思われる。わずかに頸部が認められる。304～306は前木場遺跡（18），304は須恵器で高台を有する坏である。305は浅めの脚台を有する甕，306は高坏の脚部である。305，306は成川式（古墳時代）と思われる。307～313，316～318は四方高迫遺跡（８），307は復元口縁径33cmを測る鉢形土器，口縁部に刻目突帯を有する。308は沈線文を施すものである。309は短い凹線を連続して施すもので



第21図　吾平町内の遺跡

ある。310は黒色研磨された浅鉢形土器である。311は口縁部下位に刻目突帯を有する。312は蓆目圧痕文土器である。313は口縁部で，沈線文を施す。314，315は苫野原遺跡(23)，314は沈線文を施す。315は口縁部で沈線文を施す。316，317は縄文式土器の底部である。316は高台状を呈する。318は三角突帯を有する壺形土器で弥生中期と思われる。308，309，313～317は縄文後期，307，310～312は縄文晩期のものと思われる。

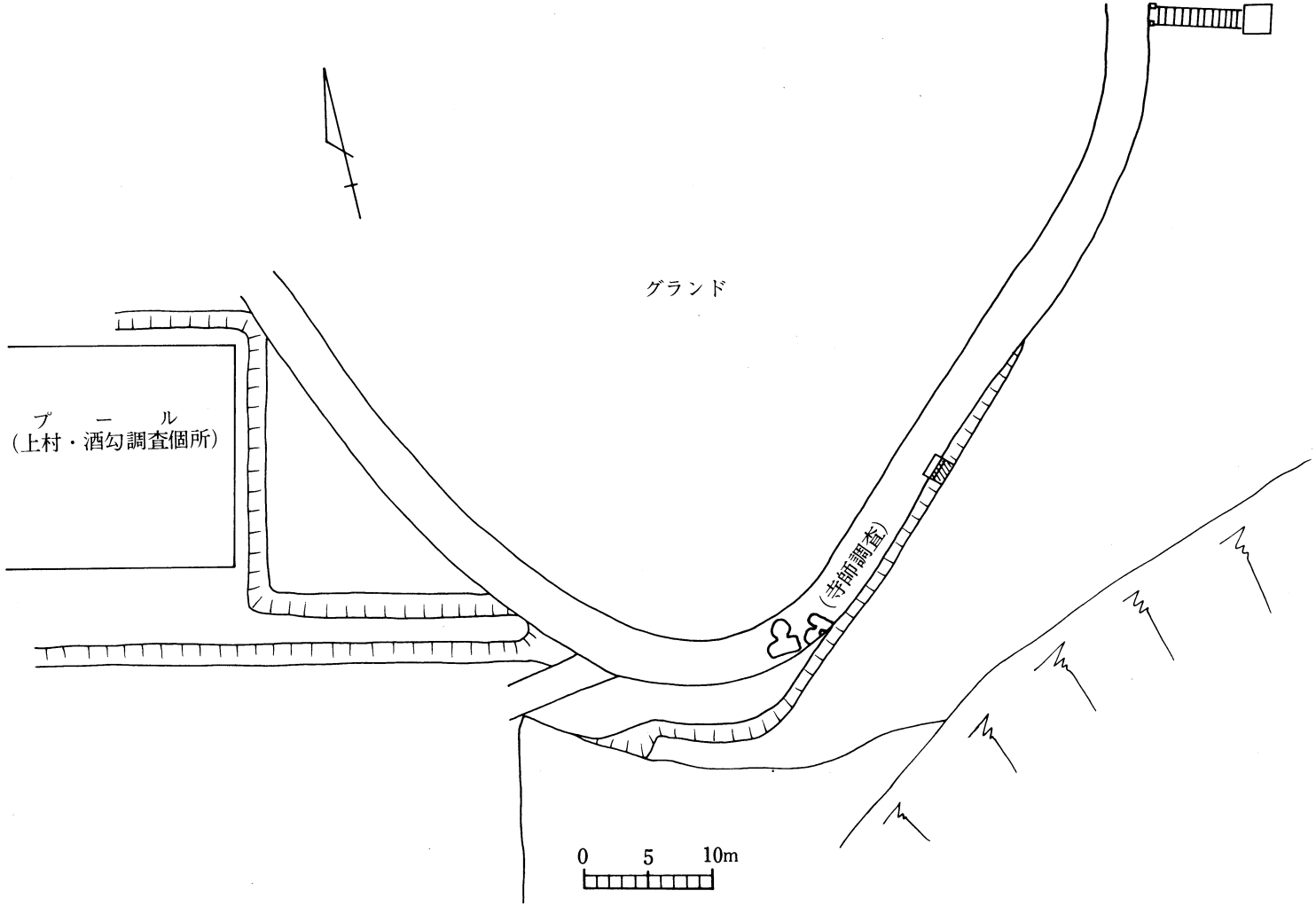


第22図　吾平町内の遺物

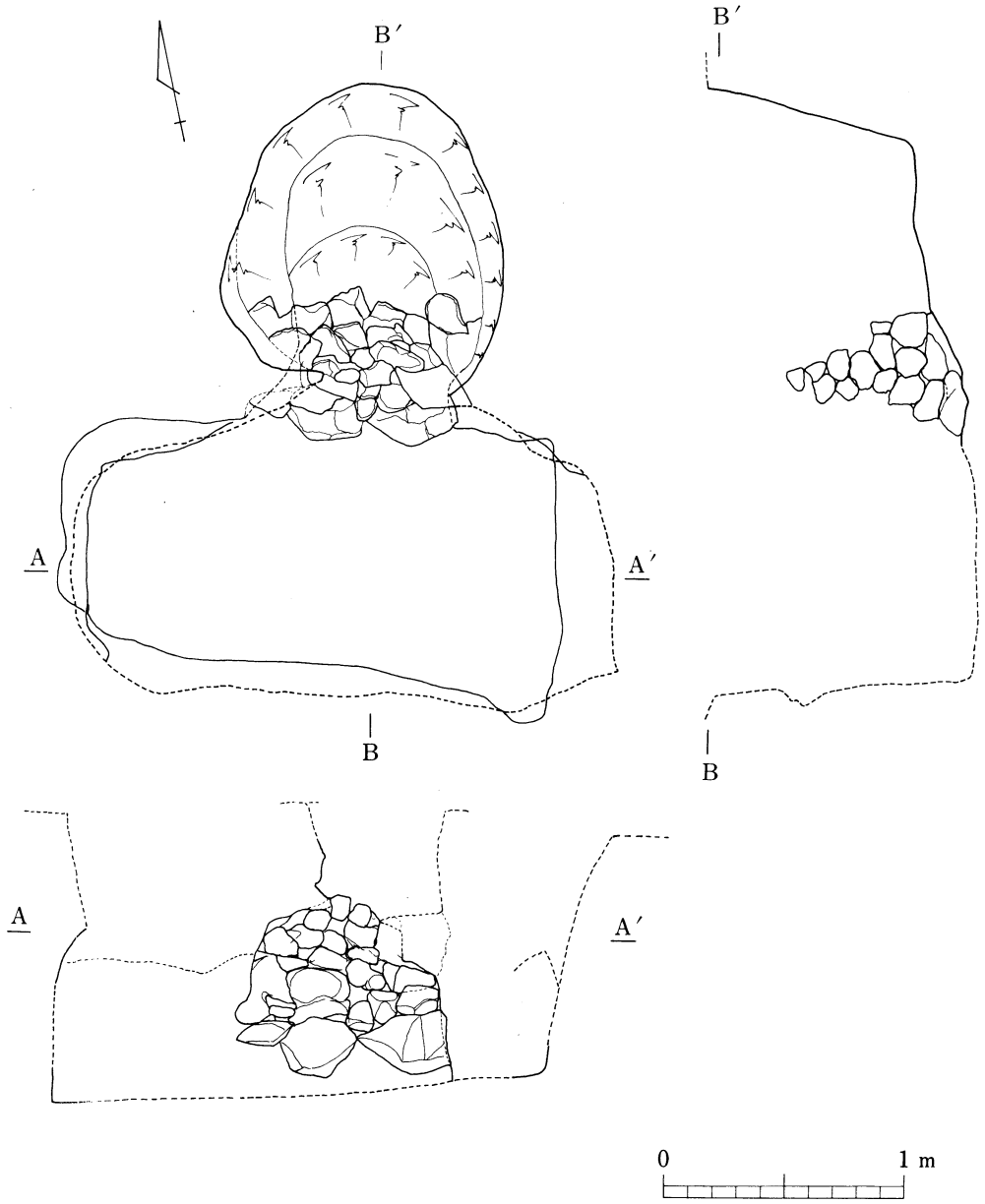
宮ノ上地下式横穴（第23図，第24図）

宮ノ上地下式横穴群は吾平小学校の校庭にあって早くからその存在が知られており，寺師見国，上村俊雄，酒匂義明等により報告されているものである。今回報告のものは昭和53年に，校庭の外周に車道を造る際に発見されたものである。玄室部は発見当時において重機等により削られて居り，形状については不明である。

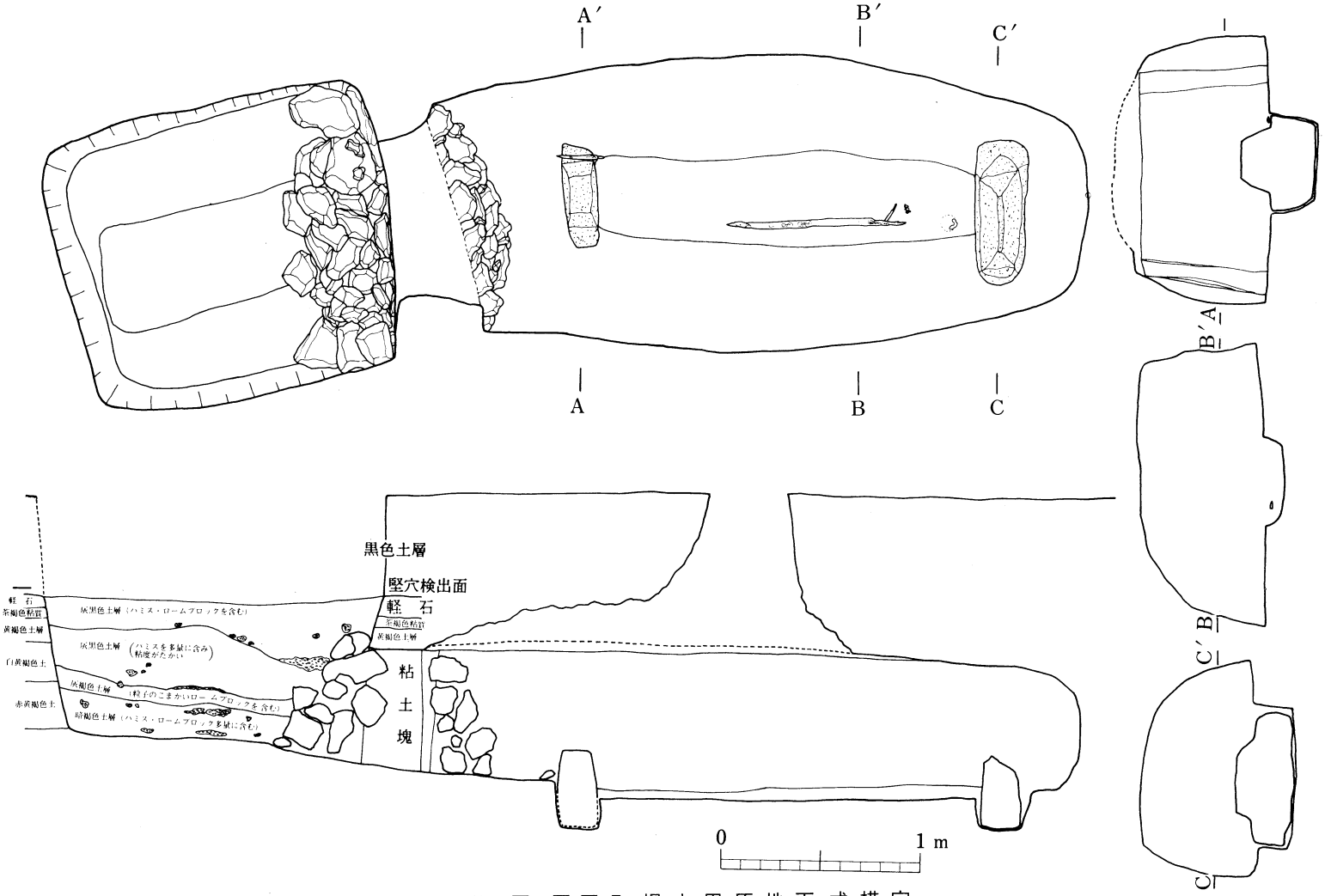
この地下式横穴は校庭の南隅にあり，上村・酒匂によって調査されたプールの位置より，約45m東側に所存する。竪穴部は北側にあり径約1.2mのほぼ円形である。羨道部は幅1m，高さは推定で1.5mを測る。玄室部の中央に取り付けてありいわゆる平入りである。玄室は発見当時にすでに壊されており，形状を明らかにすることは不可能である。復元すると平面プランが0.9m×2.1m，高さ0.8mのドーム状を呈していたものと思われる。出土遺物は工事中に鉄剣の破片が一点発見されている。



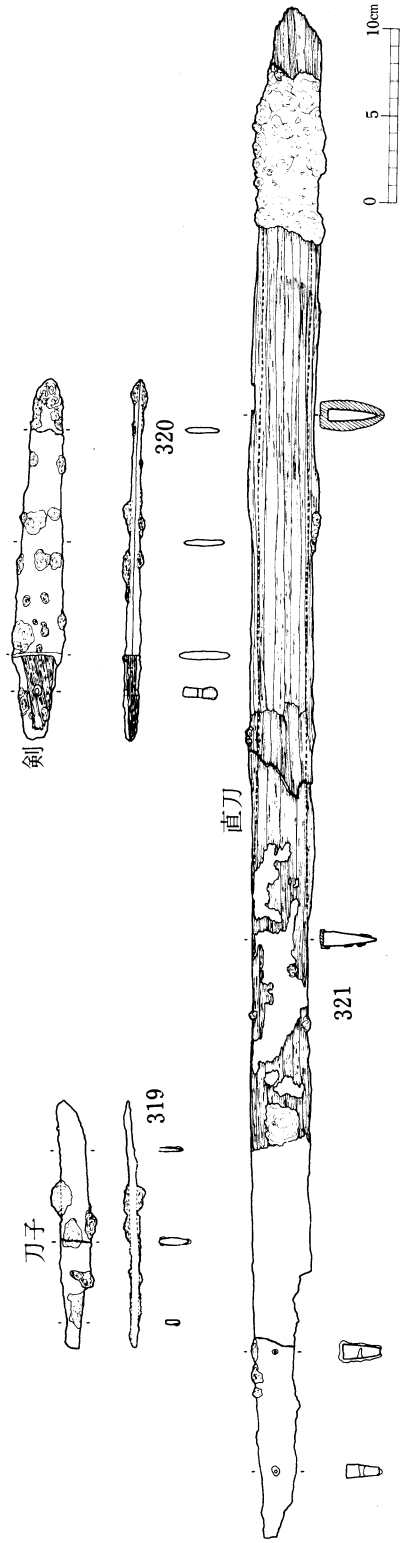
第23図 吾平町宮ノ上地下式横穴群



第24図　宮ノ上地下式横穴



第25図　吾平町掘木田原地下式横穴



第26図　吾平町掘木田原地下式横穴出土鉄器

掘木田原地下式横穴（第25図，第26図）

掘木田原地下式横穴は，昭和55年，耕作中に玄室の天井が陥没して発見されたものである。前述の宮ノ上地下式横穴より約1km西方の台地縁辺部に位置する。主軸はほぼ東西方向を示す。全長5.2m，竪穴部は西側に位置し，1.5×1.6mのほぼ方形，深さは検出面より0.7m(推定1.0m)。羨道部は上辺0.8m，下辺0.95m，高さ0.6mの台形状で長さ0.4mを測り，玄室への取り付けは妻入りである。羨道部の閉塞は10～30cm大の粘土塊による。玄室は幅0.9～1.5mの若干胴張りを持つ略長方形である。高さは0.7mでアーチ状を呈する。玄室内には羨道部寄りと，奥部に一枚ずつ軽石板を配置し，それらの間に巾0.45m，長さ1.9m，深さ5cmの死床を有する。人骨は頭骨と歯が残存しており，その状態から頭部は玄室の奥部で東を向いていたと思われる。副葬品は直刀，剣，刀子が各1点づつ発見されている。319は刀子で，全長14.4cm，茎部は長さ3.5cm，幅0.5～1.2cm，厚さ0.3cm，刃渡り10.9cmで刃区を有し，幅1.6cm，背の厚さは0.4cmを測る。320は剣で全長21cm，茎部は長は5cm，幅1.5～3cm，厚さ0.5cmを測る。目釘穴1個を有し，木柄の残痕が見られる。刃部は16cm，幅1.4～3cm，厚さ0.3～0.5cmを測る。321は直刀で全長89cm，茎部は長さ15.5cm，幅0.8～2.7cm，厚さは背部で0.6～0.9cm，刃部側で0.4cmを測り，目釘穴2個を有する。刃渡り73.5cm，刃区を有し，幅3～3.4cm，背の厚さ0.8cmを測る。鞘と思われる木質の残りが良好である。

この地下式横穴は鹿児島県内では最大級の規模であり形態も長方形，妻入りで，死床を有している事などから古いタイプのものと考えられる。5世紀末から6世紀初頭の時期が想定される。

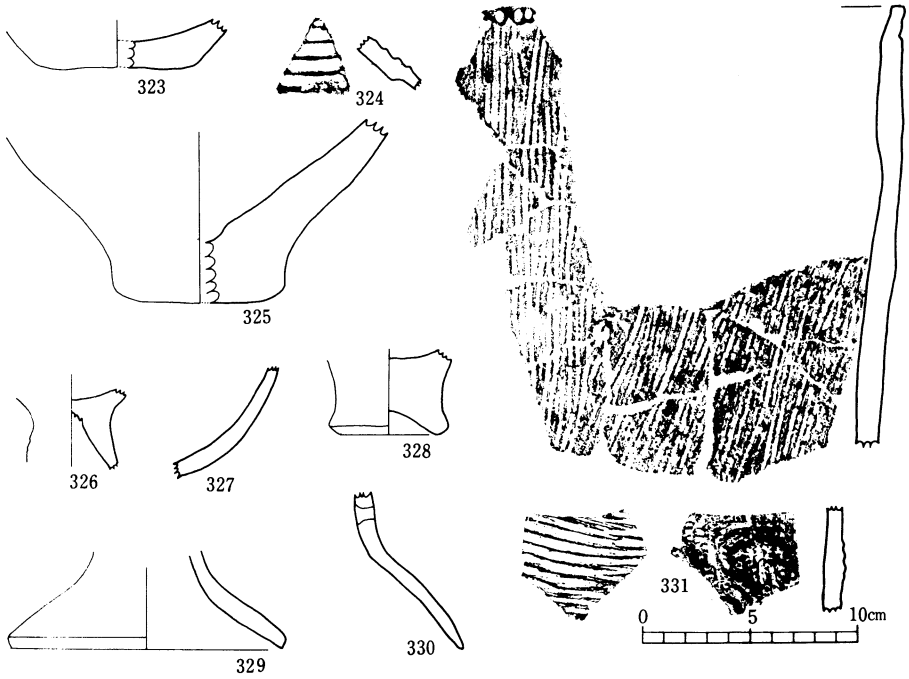
番号	遺跡名	所在地	備考
1	井牟田原	麓井牟田原	弥生
2	論地	論地	縄文・弥生
3	霧島原	麓霧島原	弥生
4	三角原	〃三角原	弥生
5	反田原	〃反田原	弥生
6	境原	〃境原	弥生
7	中尾	上名中尾	弥生・土師・須恵
8	四方高迫	上名四方高迫	縄文・弥生・土師・須恵
9	水流	〃水流	縄文
10	平ヶ堀	〃平ヶ堀	縄文
11	名主原	〃名主原	弥生
12	鶯原	麓鶯原	弥生
13	出水田原	〃出水田原	弥生
14	堀木田原	〃堀木田原	縄文・弥生
15	六条原	〃六条原	弥生
16	城ヶ迫原	〃城ケ迫原	弥生
17	道脇	〃道脇	弥生
18	前木場A	上名前木場	弥生
19	前木場原	〃前木場原	弥生
20	白坂原	〃白坂原	弥生
21	山内原	〃山内原	弥生
22	下小原	〃下小原	弥生・土師
23	苫野原A	〃苫野原	縄文・弥生
24	立元	上名立元	縄文・弥生
25	荷掛原	上名荷掛原	〃
26	新地ノ上	上名新地上	〃・弥生
27	鏡原	〃鏡原	〃
28	哀損原	西目川路哀損原	〃・弥生
29	苫原野	上名苫野原	〃〃
30	栫の下	麓栫の下	弥生
31	堀木田	麓堀木田	〃
32	町頭	〃町頭	〃

番号	遺跡名	所在地	備考
33	鶏戸神社脇	麓鶏戸神社脇	弥生
34	千寿院坂	麓千寿院坂	〃
35	大牟礼	西目路大牟礼	〃
36	モタイ坂	上名モタイ坂	〃
37	西迫	麓西迫	〃
38	赤野原	〃赤野原	〃
39	鶴川内	〃鶴川内	〃
40	池山	下名論地池山	〃
41	井神島	下名井神島	〃
42	諏訪尾	上名訪諏尾	〃
43	角野原	上名角野原	〃
44	下名	下名学校隣	〃
45	鏡原上	上名鏡原上	〃
46	車田	〃車田	〃
47	前木場	上名前木場	〃
48	黒羽根	〃黒羽根	〃
49	川上	麓川上	〃
50	陣之尾	麓上名陣之尾	〃
51	赤ヶ迫古墳群	麓寺ヶ迫	古墳
52	天神原遺跡	下名天神原	古墳 地下式横穴群
53	池山古墳群	論地池山	古墳
54	宮ノ上遺跡	宮ノ上吾平小学校	古墳 地下式横穴群
55	千寿院	麓千寿院	歴史
56	含粒寺跡	上名門前	〃
57	未次城	下名川東井神島	〃
58	筒迫城(松下城)	上名	〃
59	前木場B	上名前木場	須恵器
60	赤野板碑	上名赤野	五輪塔

第6節　串良町の遺跡（第27図～第35図）

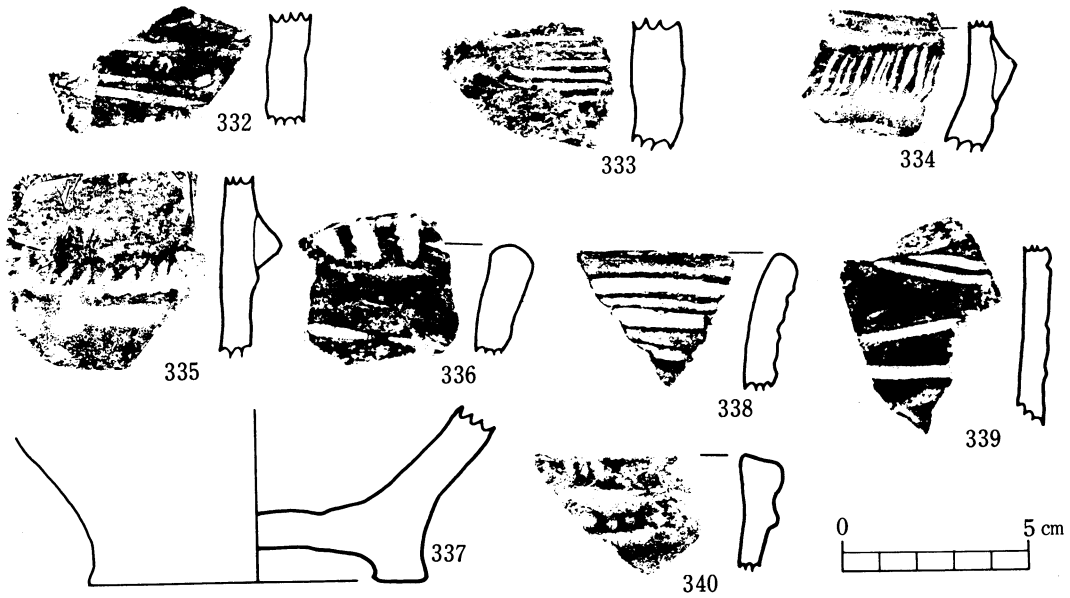
串良町は大隅半島の東南部のほぼ中央に位置し，東串良町，高山町，鹿屋市，大崎町と隣接している。地形は山地，台地，低地に大別されるが，大部分は台地で，いわゆる笠野原台地と呼ばれている。河川は肝付川とその支流の串良川があり，その流域に多くの遺跡が見られる。今までに縄文時代，弥生時代，古墳時代，中世山城等の存在が知られている。1～44は近年の調査により確認された遺跡，45～66は遺跡地名表より抜き出した遺跡である。

322は昭和52年に確認調査を行った上小牧遺跡出土の土器である。出土層はアカホヤ層の下層で乳白色粘質土層である。口縁部に刻目を有し，器面全体に貝殻条痕を施す円筒形土器である。縄文時代早期に位置するものと思われる。323，324は平野上遺跡（23），323は壺形土器の底部，324は壺形土器の肩部で三角突帯を廻らす。いずれも弥生時代のものと思われる。325は牧原遺跡(22)，壺形土器の底部である。成川式（古墳時代）であろう。326，329，332～334は益畑遺跡(9)，326，329は高坏の脚部で外面は丹塗りである。古墳時代のものと思われる。332は沈線文を施すもので縄文時代後期，333は貝殻条痕を施すもので，円筒土器と思われ，縄文時代早期，334はヘラによる連続した刻目を施すもので縄文時代後期と思われる。327は岡崎上遺跡(57)，高坏の坏部で外面は丹塗りである。古墳時代と思われる。328は是ヶ迫遺跡（6），甕形土器の底部で若干あげ底の脚台である。弥生時代と思われる。330，331は村迫遺跡（33），330は高坏の脚部で，円形の透かしが認められる。331は須恵器で，外面は平行叩き文，内面は同心円叩き文が見られる。いずれも古墳時代と思われる。



第27図　串良町内の遺物

335～337は寶珠ヶ鼻遺跡(19)，335は連続刺突文と，凹線文を施す。336は口唇部に刻みをもち，沈線文を施す。337は底部で高台状を呈する。いずれも縄文時代後期と思われる。338，339は富ヶ尾前遺跡(21)で沈線文を施すものである。縄文時代後期と思われる。340は神之園遺跡(35)，口縁部に二条の刻目突帯を有するもので，弥生時代前期と思われる。

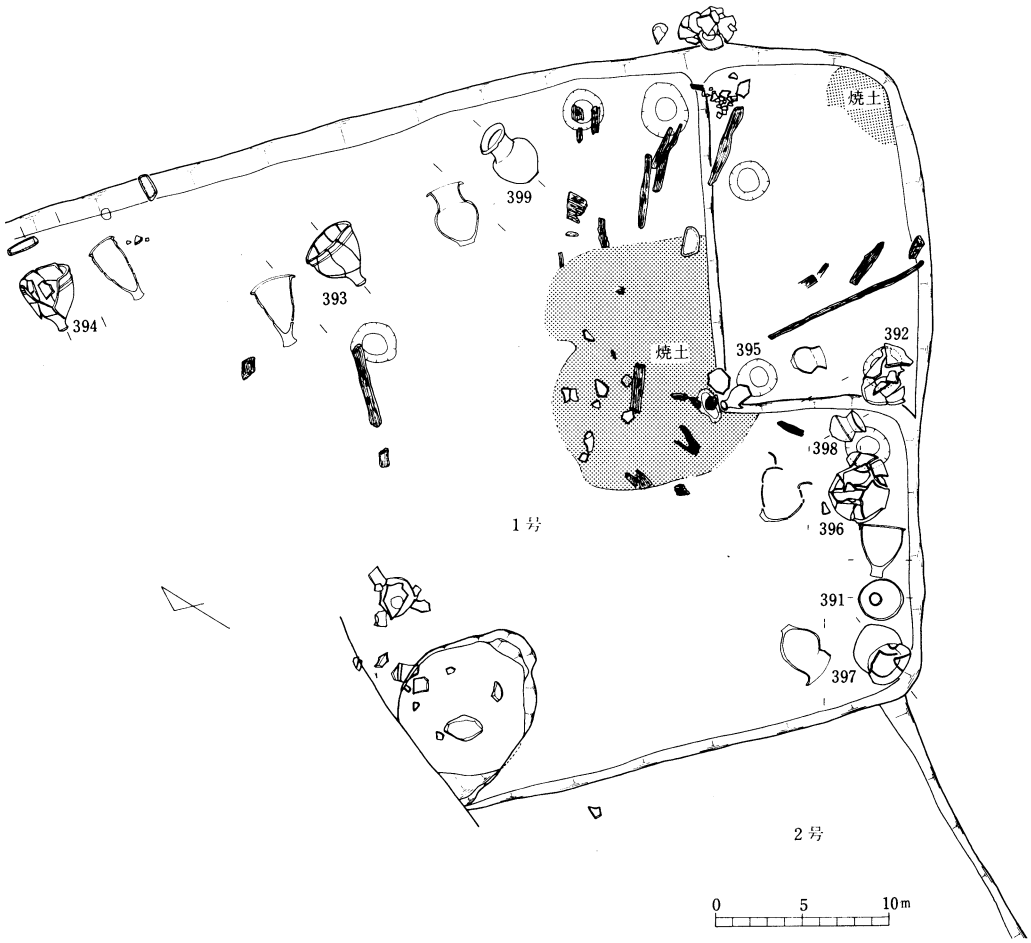


第28図　串良町内の遺物

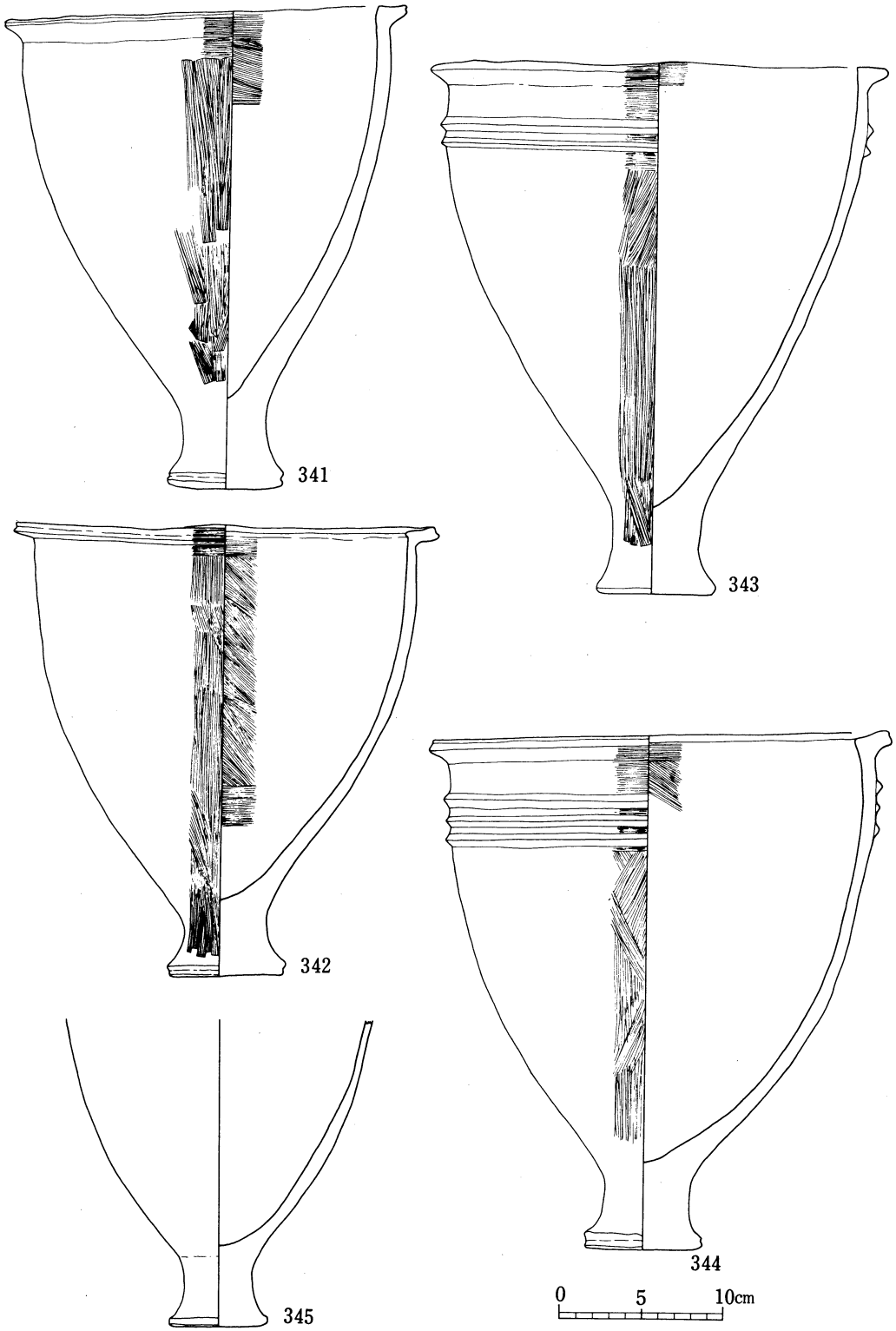
吉ヶ崎遺跡（36，第29図～第35図）

昭和52年に確認調査を行ない，弥生中期の住居址が検出された遺跡である。住居址は二基が重複して検出されたが，全体の形状は判明しない。一号住居址は，短辺3.5m，長辺５m以上の長方形プランが想定される。住居址の東隅に階段状の施設を持ち，ピットも八ヶ所認められる。この住居址の特徴は焼土が全面に見られ，炭火材が多く残る。また遺物も完全な状態で残り，二次的な火がかかったような状態が観察された。おそらく火災により消失したものと思われる。遺物は床面に密着した状態で甕形土器４，壺形土器４，磨製石斧２，磨製石鏃３が検出され，覆土中よりも多数の土器片，磨製石斧１，磨製石鏃２，軽石製品１が出土した。341～349は床面直上より出土した土器である。341～345は充実した脚台を有する甕形土器，341は口縁径25cm，器高25.3cmを測る。口縁部は短く，逆Ｌ字状に外反し端部はやや凹む。器面はハケ調整による。342は口縁径26cm，器高28cmを測る。口縁部は逆Ｌ字状に外反し端部はやや凹む。口縁内面には張り出しが認められる。内外面共にハケ調整による。343は口縁径28cm，器高33cmを測る。口縁部は逆Ｌ字状に外反する。胴部上位に二条の三角突帯を廻らす。内外共にハケ調整。344は口縁径28.4cm，器高31.6cmを測る。口縁部は逆Ｌ字状に外反し端部はわずかに凹む。胴部上位に三条の三角突帯を廻らす。ハケ調整。346～349は壺形土器，346は口縁径28.6cm，器高36.5cmを測る。平底の小さな底部で胴部は膨む。しまった頸部から口縁部へ大きく外反する。器面は

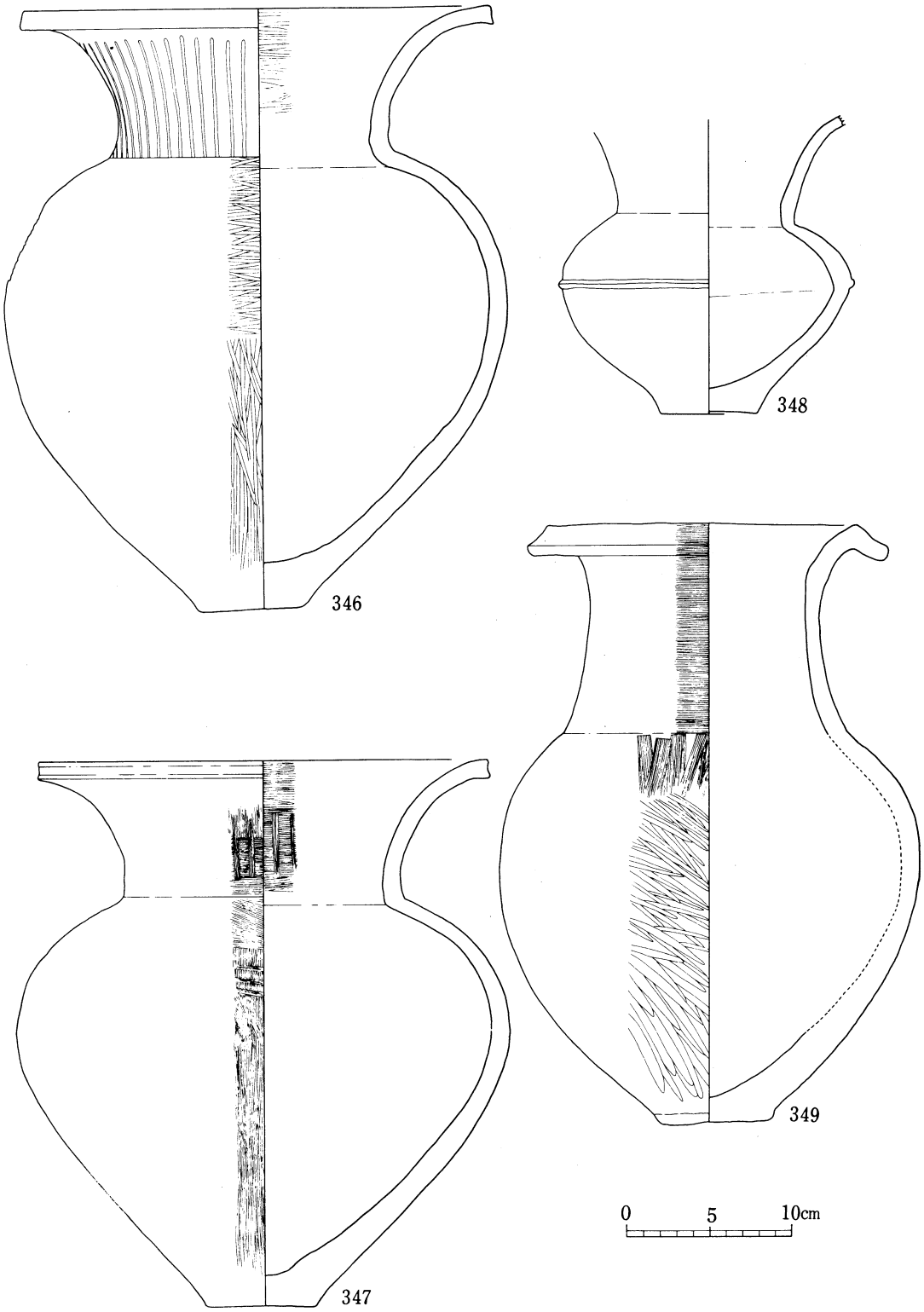
ヘラによるこまかい調整が施され，頸部から口縁部へかけてヘラによる暗文が施される。347は口縁径27.6cm，器高33.2cmを測る。器形は346とほぼ同じである。器面はハケ調整。頸部から口縁部にかけてはハケによる横ナデ調整の後に，ハケによる縦方向の暗文が施される。348は口縁部を欠く小形の壺，底部は径6cmの平底で胴部は球形状に膨む。しまった頸部より大きく外反する。胴部最大径の位置に突帯を廻らす。349は口縁径22cm，器高36.5cmを測る。やや小さめの平底から長胴気味のあまり張らない胴部へと立上り，頸部はやや長い。口縁部は垂れ下り気味に外反する。肩部から頸部，口縁部にかけてはハケ調整，肩部から底部にかけてはナデ調整が施される。以上の341～349の土器は完成品で1号住居址の床面に密着した状態で出土し，セット関係をなすものと思われる。時期的には弥生時代中期中葉と考えられる。従来，弥生時代中期は山ノ口式土器としてとらえられて居り，これらも山ノ口式に含まれる。しかしながら，山ノ口式土器の時期の幅が広く，細分化が要求されている。その点で，341～349の土器は弥生時代中期中葉の一時期を画するものとしてとらえられ，重要な意味を持つものと考えられる。



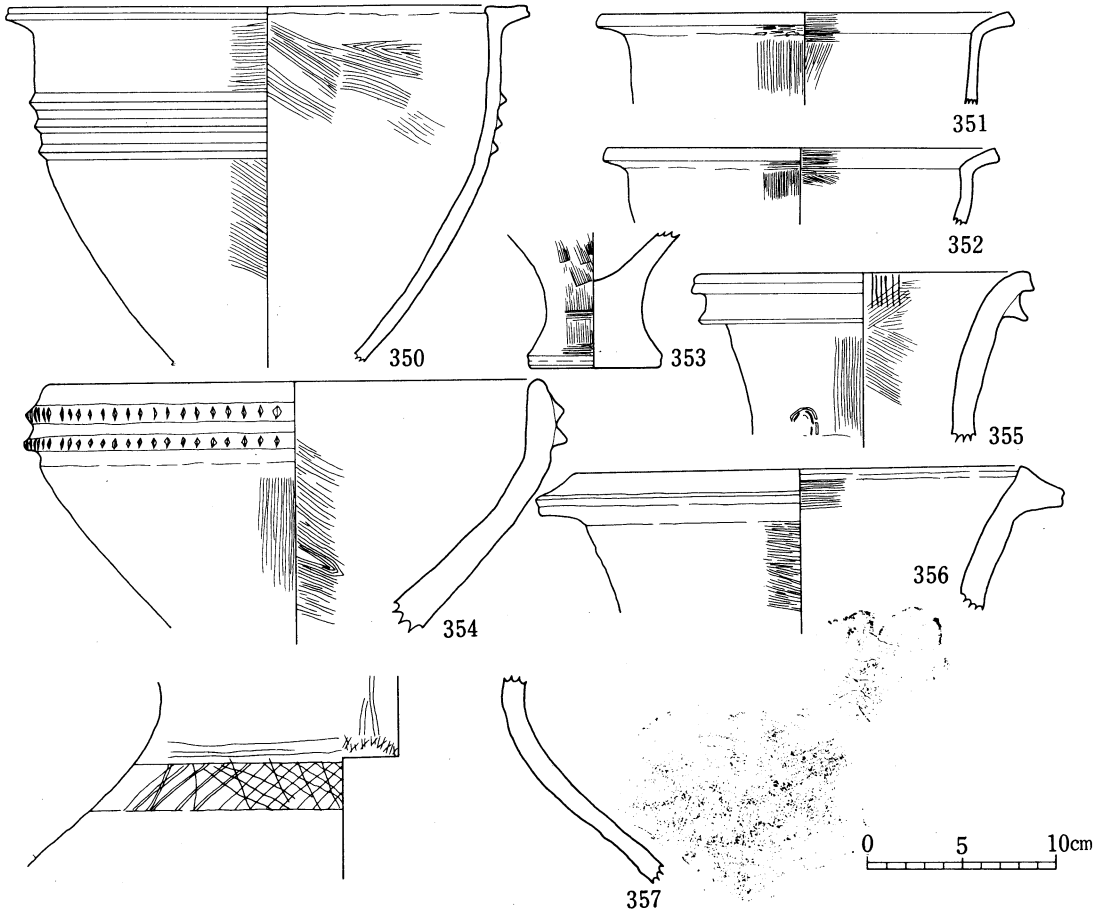
第29図　吉ヶ崎遺跡，住居址平面図



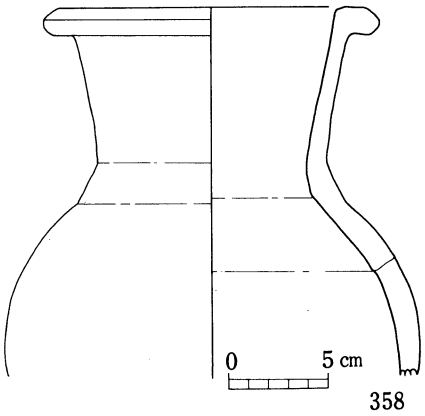
第30図　吉ヶ崎遺跡，１号住居址床面直下出土土器



第31図　吉ヶ崎遺跡１号住居址，床面直上出土土器



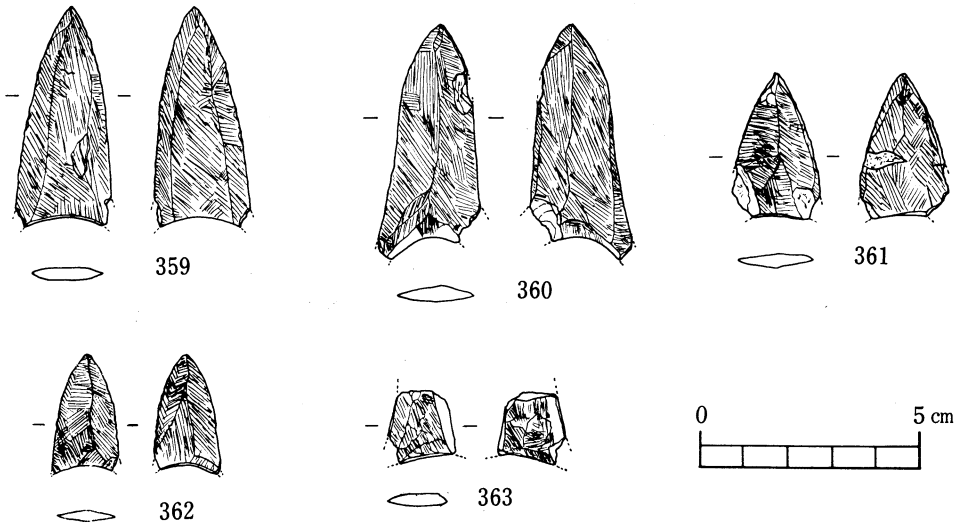
第32図　吉ヶ崎遺跡１号住居址出土遺物



第33図　吉ヶ崎遺跡出土遺物

350～357は１号住居址の覆土中より出土した土器である。350～353は甕形土器，350は復元口縁径27.6cm，口縁部は逆Ｌ字状に外反し，胴部に三条の三角突帯を廻らす。351，352は復元口縁径が22cm，21cmを測るもので，口縁部はなだらかに外反するものである。353は底部で充実した脚台。354は鉢形土器，口縁径26cmを測る。口縁部が内湾するやや浅めの鉢である。口縁部に二条の刻目突帯を廻らす。355～357は壺形土器，355は口縁径18cmを測る。口縁部の外反は大きくない。口縁部下位に突帯を廻らし二叉状の口縁をなす。356は口縁径28cmを測る。口縁部はやや垂れ下り気味に外反し，内面に張り出しを有する。357は肩部および頸部に沈線による文様を施すものである。358は２号住居址に伴うものと思われる壺形土器，口縁径は17cmを測る。胴部の張りは少ない。頸部はやや長く直行気味で，口縁部は逆Ｌ字状に外反するものである。350～357・358はいずれも弥生中期中葉頃と思われる。

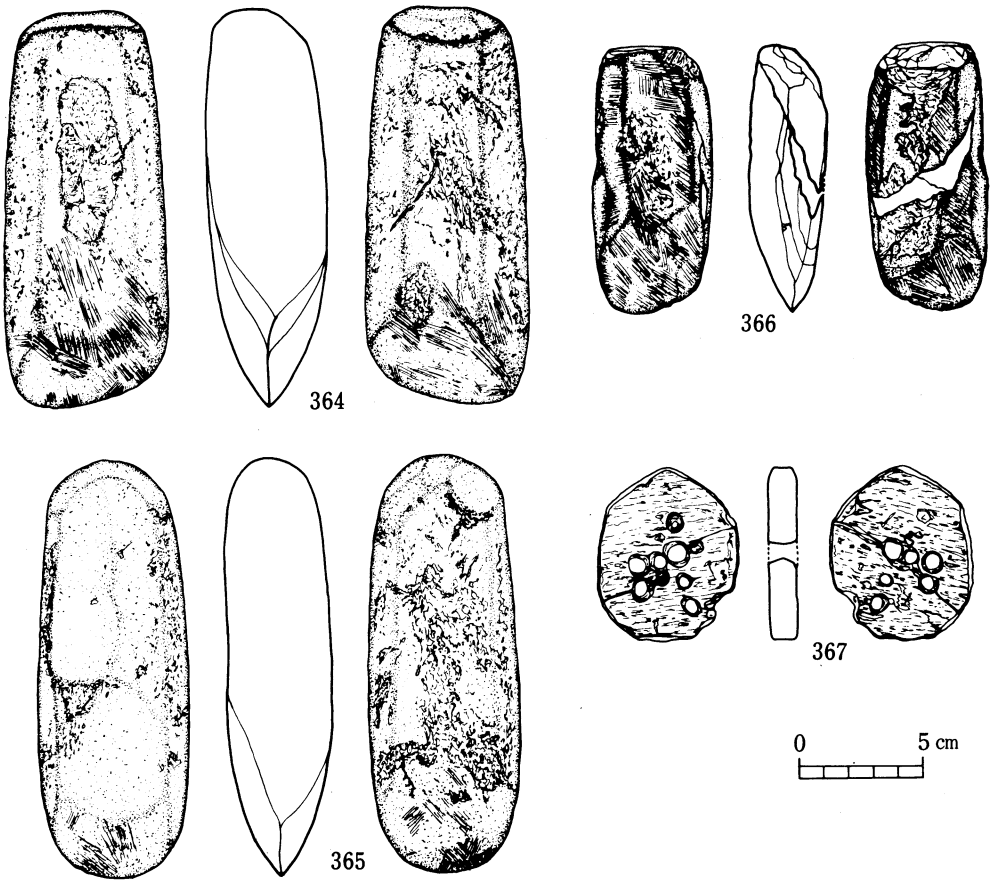
359から363は，扁平無茎の凹基式の磨製石鏃で，素材として粘板岩を用いている。359は最大長5.0cm，最大幅2.2cm，最大厚0.3cm，重さ3.8g を計り，基部両端が少々欠けているが，二等辺三角形状を呈している。両面ともに器面全体に研磨痕が顕著に観察され，製作時のものと思われる。両面ともに両側縁寄りには先端部から基部端部にかけて弱い稜を作り出している。360は，最大長5.3cm，最大幅2.3cm，最大厚0.4cm，重さ4.6g を計り，先端部及び基部端部，片側側縁の上位が少々欠けているが，二等辺三角形状を呈する。両面ともに器面全体に研磨痕が顕著に観察され，片面は基部付近と先端部から基部の中央を結ぶ線上付近に，片面は，さらに両側縁に明瞭な稜を作り出している。361は，最大長3.3cm，最大幅2.0cm，最大厚0.3cm，重さ2.3g を計り，先端部及び基部両端部ともに欠けているが，二等辺三角形を呈する。両面ともに器面全体に研磨痕が顕著に見られ，整形上のためか，器面に多くの稜を作り出している。362は，最大長2.7cm，最大幅1.5cm，最大厚0.3cm，重さ1.1g を計り，先端部と基部面端部ともに欠けているが，二等辺三角形状を呈する。両面ともに器面全体に入念な研磨痕が観察され，両面ともに先端部から基部の中央を結ぶ線上付近に稜を作り出している。363は，磨製石鏃の破片で，そのほとんどは破損しているが，基部と側縁の一部である。両面ともに研磨痕が観察される。



第34図　吉ヶ崎遺跡石器実測図(磨製石鏃)

364～366は，磨製石斧で，364，365は，砂岩を素材に用いた蛤刃状の石斧で，366は，素材として粘板岩を用いている。364は，全長16.2cm，最大幅6.7cm，最大厚5.0cm，重さ850g を計り，頭部は，そのふくらみから平坦で胴部側辺との境が明瞭で，胴部は上半より下半の幅がやや大きい。器面全体に磨面が認められ，両面ともに刃部付近に擦痕が認められ，刃部は小さい刃こぼれが認められ，長年の使用のためか扁刃を呈している。両面ともに装着部分と思われる所は，その一部が白く痕跡が認められる。365は，全長17.0cm，最大幅5.7cm，最大厚4.3cm，重さ930

gを計り，器面全体が入念に磨かれたあと，両側縁及び片面に敲打による痕跡が認められる。頭部はそのふくらみよりまるくふくらみ，胴部側辺との境は不明瞭で，胴部はほぼ平行である。両面ともに刃部付近に擦痕が認められ，刃部は円刃を呈し，一部刃こぼれも認められる。366は，全長10.9cm，最大幅4.9cm，最大厚3.0cm，重さ250gを計り，刃部は，両刃で扁刃を呈し，刃こぼれが認められる。器面全体ともに磨かれ明瞭な稜が認められ，本石斧は5つに分割され，その一部は出土が認められず，両面および側縁の一部は装着部分と思われる所に，敲打による痕跡が認められる。367は，全長7.1cm，最大幅5.7cm，最大厚1.2cmの軽石製の製品で，用途は不明である。両面より6ヶ所に穴が穿かれ，さらに片面より2ヶ所の穴が穿かれているが貫通していない。穴の径は0.4cmから1.0cmまでの大きさで，その位置については不規則である。二つに分割された状態で出土が認められている。



第35図　吉ヶ崎遺跡石器実測図(磨製石斧)・軽石製品実測図

番号	遺跡名	所在地	備考
1	牧山	細山田牧山	縄文・弥生
2	入部堀	〃 入部堀	弥生
3	町田堀	〃 町田堀	縄文・弥生
4	北原古墳	〃 北原	古墳
5	新堀	〃 新堀	縄文
6	是ヶ迫	〃 是ヶ迫	縄文・弥生
7	川久保	〃 川久保	弥生
8	小牧	上小原小牧	弥生・土師
9	益畑	細山田益畑	縄文・弥生
10	京の塚	細山田下中京塚	弥生・古墳
11	石塚	有里石塚	〃
12	瓜々良蒔	〃〃 永田堀	〃
13	永田堀	〃〃 永田堀	〃
14	枦場	〃 枦場	〃
15	熊ヶ鼻	〃 熊ヶ鼻	縄文(石鏃) 弥生
16	宮留古墳	〃 宮留	古墳
17	柿木迫古墳	〃 柿木迫	〃
18	七反古墳	〃 七反	〃
19	寶珠ヶ鼻	〃 寶珠ヶ鼻	縄文・弥生
20	上大塚原	〃 上塚原	古墳
21	富ヶ尾前	〃 富ヶ尾	弥生・土師
22	牧原	〃 牧原	〃・古墳
23	平野上	下小原平野上	〃
24	古柵	岡崎古柵	〃
25	上ノ馬場	〃 〃	土師
26	小塚	〃 小塚	古墳・ 地下式横穴
27	古園	〃 古園	縄文・弥生
28	白塞水上	下小原白塞水上	弥生
29	白塞水古墳	下小原白塞水	古墳
30	白塞水	〃 〃	弥生
31	鍋池ノ上	〃 鍋池ノ上	〃
32	後藤迫	〃 後藤迫	〃
33	村迫	〃 村迫	〃

番号	遺跡名	所在地	備考
34	塚ノ下古墳	上小原塚ノ下	古墳
35	神ノ園	上小原上ノ園	弥生
36	吉ヶ崎	上小原吉ヶ崎	〃(住居址) 古墳
37	上小牧	〃 上小牧	弥生
38	上小牧古墳	〃 上小牧	古墳
49	アマガ塚古墳	上小原久保	〃
40	供養塚古墳	〃 平床	〃
41	城ヶ崎城	〃 久保	中世
42	松崎	〃	弥生
43	上別府	〃 上別府	〃
44	柊ヶ迫	〃 柊木迫	〃
45	ホンドンガマ	細山田下中	縄文・弥生
46	立小野A	〃 立小野	〃
47	立小野B	〃 〃	弥生
48	高松	〃 高松	〃
59	堂園	〃 堂園	〃
50	生栗巣	〃 生栗巣	〃
51	立小野	〃 立小野	〃
52	アタゴ山	〃 北原	〃
53	銭亀岡	〃 銭亀岡	〃
54	栄田	上小原栄田	〃
55	堅田	〃 岡崎立田	〃
56	大塚原	〃 有里大塚原	〃
57	岡崎の上	〃 〃 岡崎の上	〃
58	宮の下	〃 〃 宮ノ下	〃
69	上小原古墳	上小原下方限田の上	古墳群
60	大塚原古墳	有里大塚原	〃
61	岡崎古墳	〃 岡崎	〃
62	北田ノ上古墳	〃 北田ノ上	〃
63	フゾ山	下小原白塞水	地下式横穴
64	北原城跡	細山田生栗巣	城跡
65	鶴亀城本丸跡	岡崎	(指定文化財)
66	北頭館仮屋跡	〃	〃

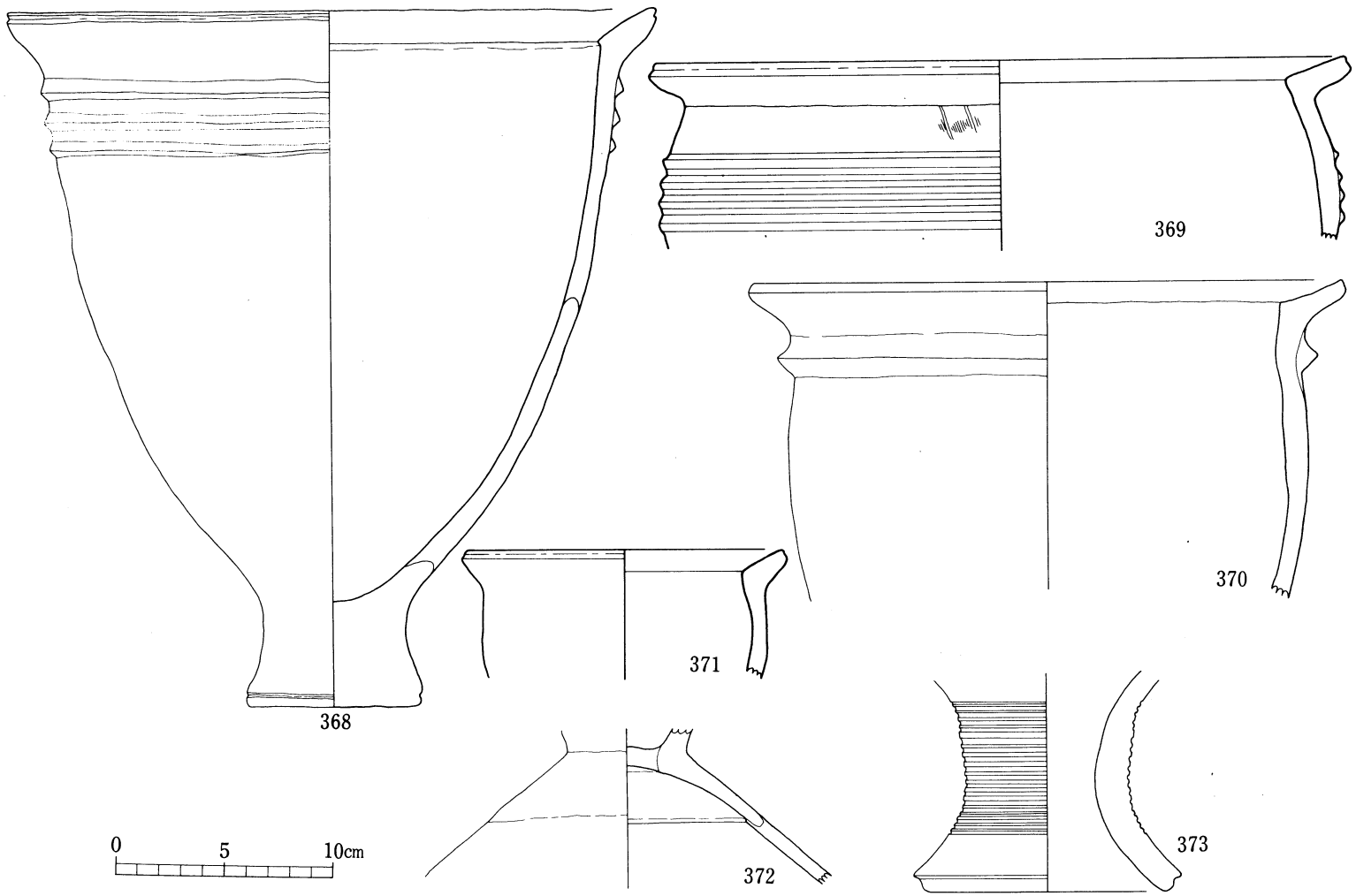
第７節　高山町の遺跡・遺物（第36図～第40図）

高山町は大隅半島のほぼ中央部に位置し，一部は志布志湾に面している。鹿屋市，吾平町，串良町，東串良町，内ノ浦町と隣接する。南側に標高800～900mの国見山系が控え，山地の裾が舌状台地状にのびてくる。又，肝属川の本流，支流が流れ込み，肥沃な沖積平野が広がり穀倉地帯となる。本町は古くから古墳をはじめとする文化財の調査等が行なわれており，国指定の塚崎古墳群等が知られている。また，花牟礼遺跡で県内最初の弥生時代の住居址が発見されるなど多くの遺跡が知られる。１～14は近年の調査により確認された遺跡，15～90は遺跡地名表より抜き出した遺跡である。

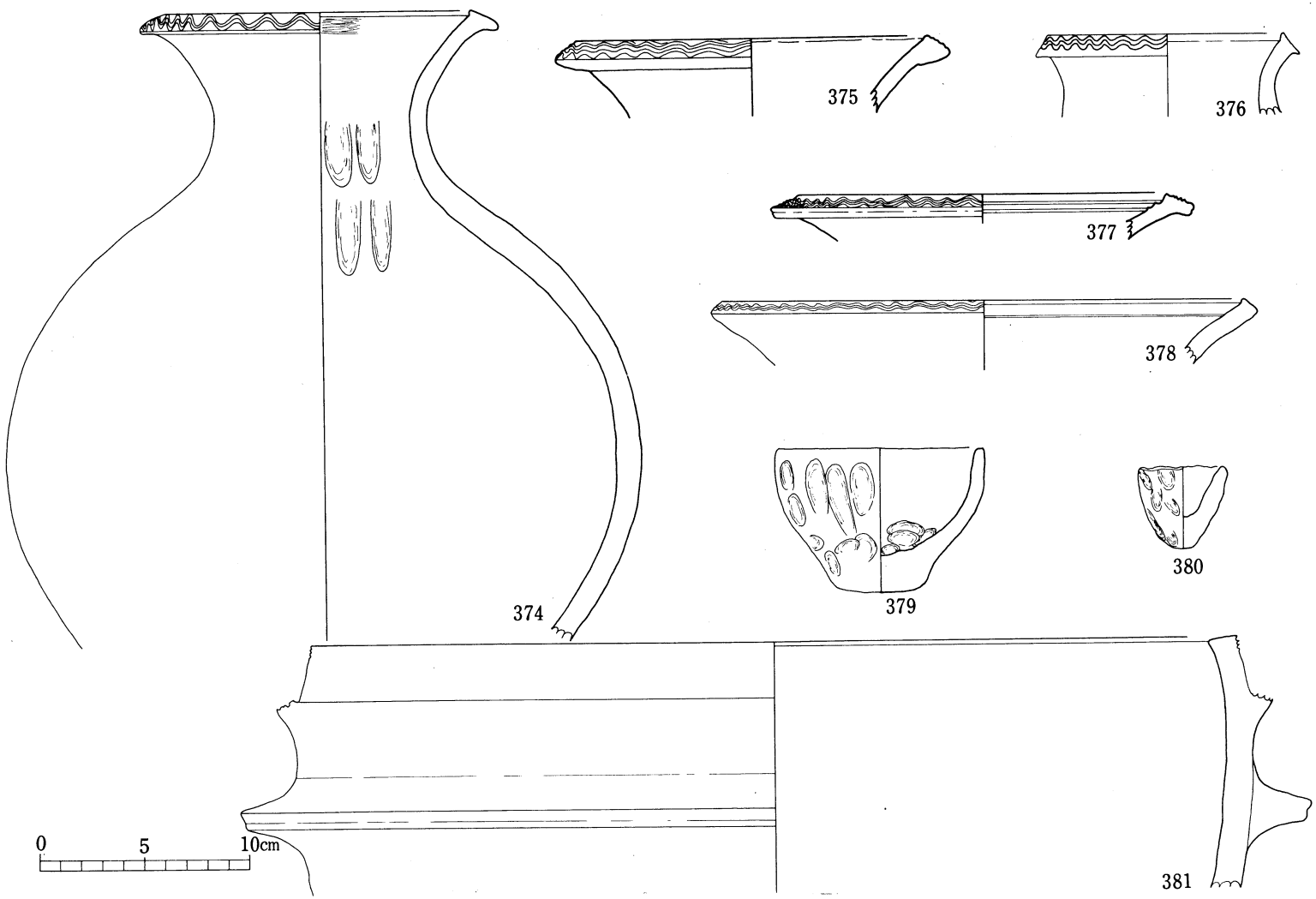
塚崎遺跡（44，45，53，第36図～第38図）

塚崎遺跡は塚崎台地の中に，原遺跡（45），堀込遺跡（44），塚崎遺跡（53）等が存在するが，これらをまとめて塚崎遺跡とした。塚崎台地にはこの他に国指定史跡の塚崎古墳群があり前方後円墳４基，円墳40基，地下式横穴数基が知られている。

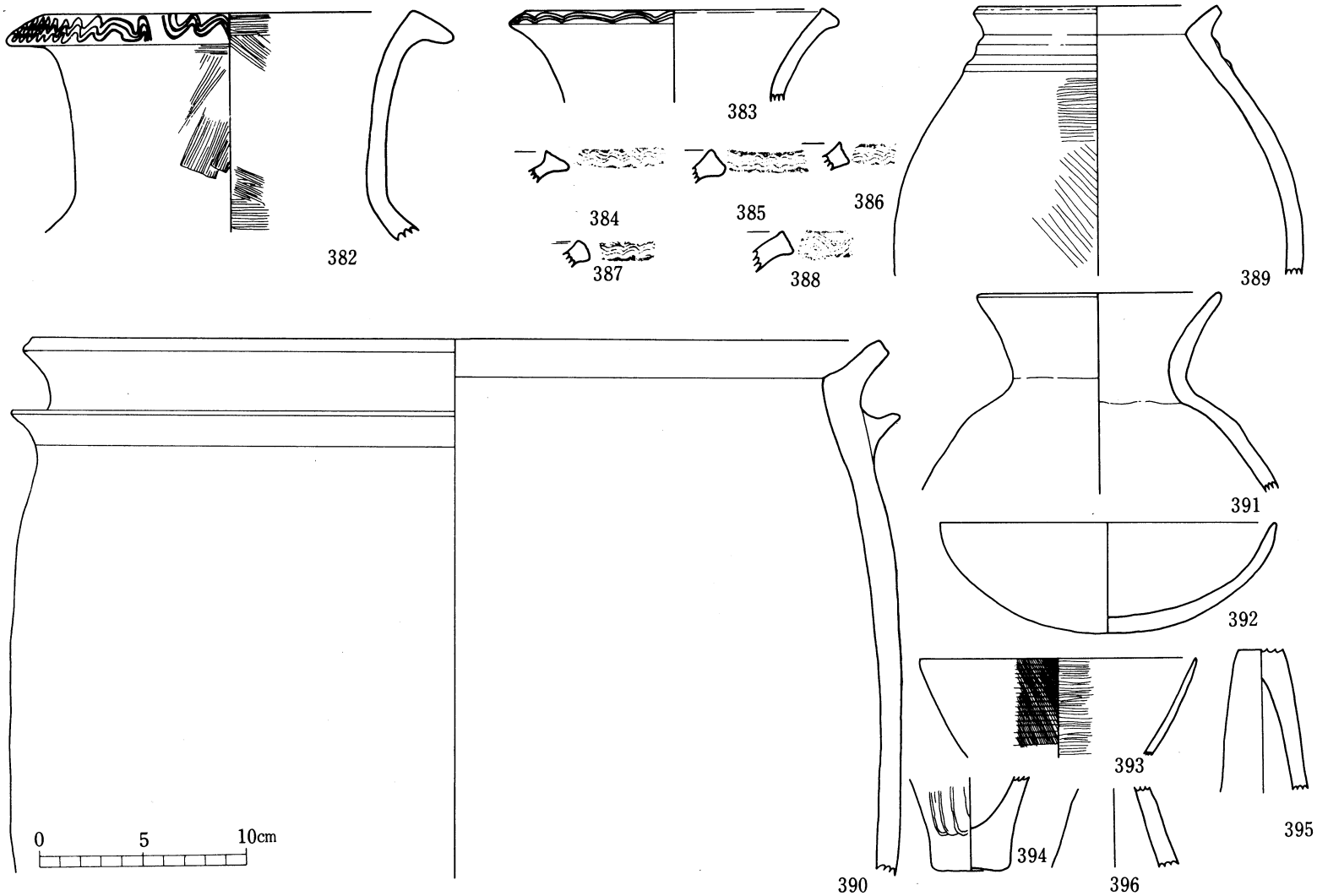
第36図～第38図は，昭和52年，54年に確認調査を行なったものである。368～371は甕形土器，368は口縁径30cm，器高32cmを測る。底部を充実した脚台で胴部はわずかに張る。口縁部は「く」の字状に外反し内面はわずかに張り出す。胴部上位に三条の三角形貼付突帯を廻らす。底部付近，及び胴部中位に接合部の痕跡が認められる。369は口縁径32.5cmを測る。胴部は膨み口縁部は「く」の字状に近く外反する。胴部上位に四条の三角形貼付突帯を廻らす。370は口縁径27.5cmを測る。口縁部は「く」の字状に近く外反し，胴部はあまり張らない。口縁部下位に一条の三角形貼付突帯を廻らす。371は口縁径15cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し，突帯は有しない。372は蓋と思われる。378は器台，18条の沈線を廻らす。374～378，382～388は壺形土器で，口縁部に櫛描波状文を施すものである。374は口縁径17cmを測る。胴部は球形状に膨む。頸部はしまり，口縁部へと外反する。口縁部は短く，垂れ下り気味に外反する。382は口縁径21.5cmを測る。しまった頸部より口縁部へ直行気味に立ちあがり，口縁部は垂れ下り気味に外反するものである。377は口縁内面に二条の突起を廻らす。375，376，378，383～388は口縁部が肥厚しており，櫛描波状文は口唇部に施されているかに見える。379は埦形土器，口縁径10cm，器高6.8cmを測る。口縁部がわずかに内湾し，器壁内外面には指による調整痕が認められる。380は手捏土器，口縁径4.3cm，器高3.9cmを測る。器壁に指による調整痕が認められる。381は大型甕，口縁部は欠損するが推定径52cmと思われる。口縁下位に突帯を廻らす。389は口縁径12cmの壺形土器，胴部はあまり張らず，口縁部が頸部のしまった部位よりすぐに「く」の字状に外反するものである。肩部に二条の三角形貼付突帯を廻らす。390は口縁径42cmを測る大型甕，胴部はあまり張らず，口縁部及び口縁下位の突帯は同じように「く」の字状に外反する。391は口縁径11.8cmの壺形土器，392は口縁径16.2cm，器高5.4cmのやや浅めの埦形土器，393は坩形土器の口縁部と思われる。394は鉢形土器か甕形土器の底部と思われる。395，396は高坏の脚部である。368～390は弥生時代中期中葉より後半にかけてのもの，391～396は古墳時代のものと思われる。



第36図　塚　崎　遺　跡　出　土　遺　物



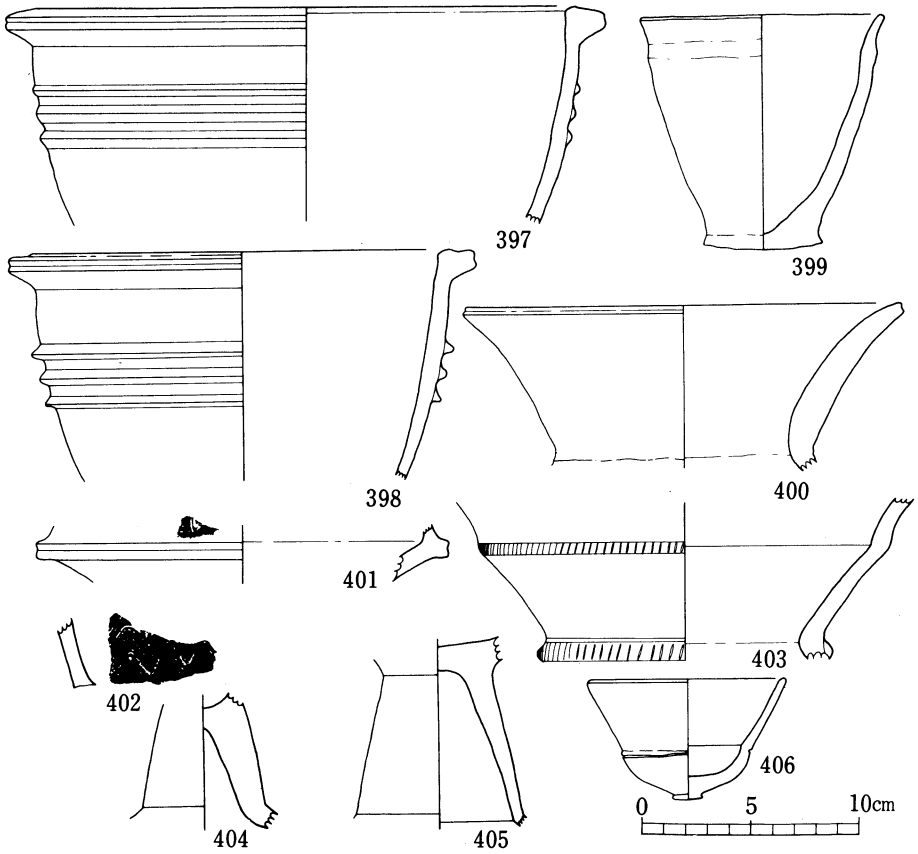
第37図・塚崎遺跡出土遺物



第38図　塚崎遺跡出土遺物

上原遺跡（89，第39図）

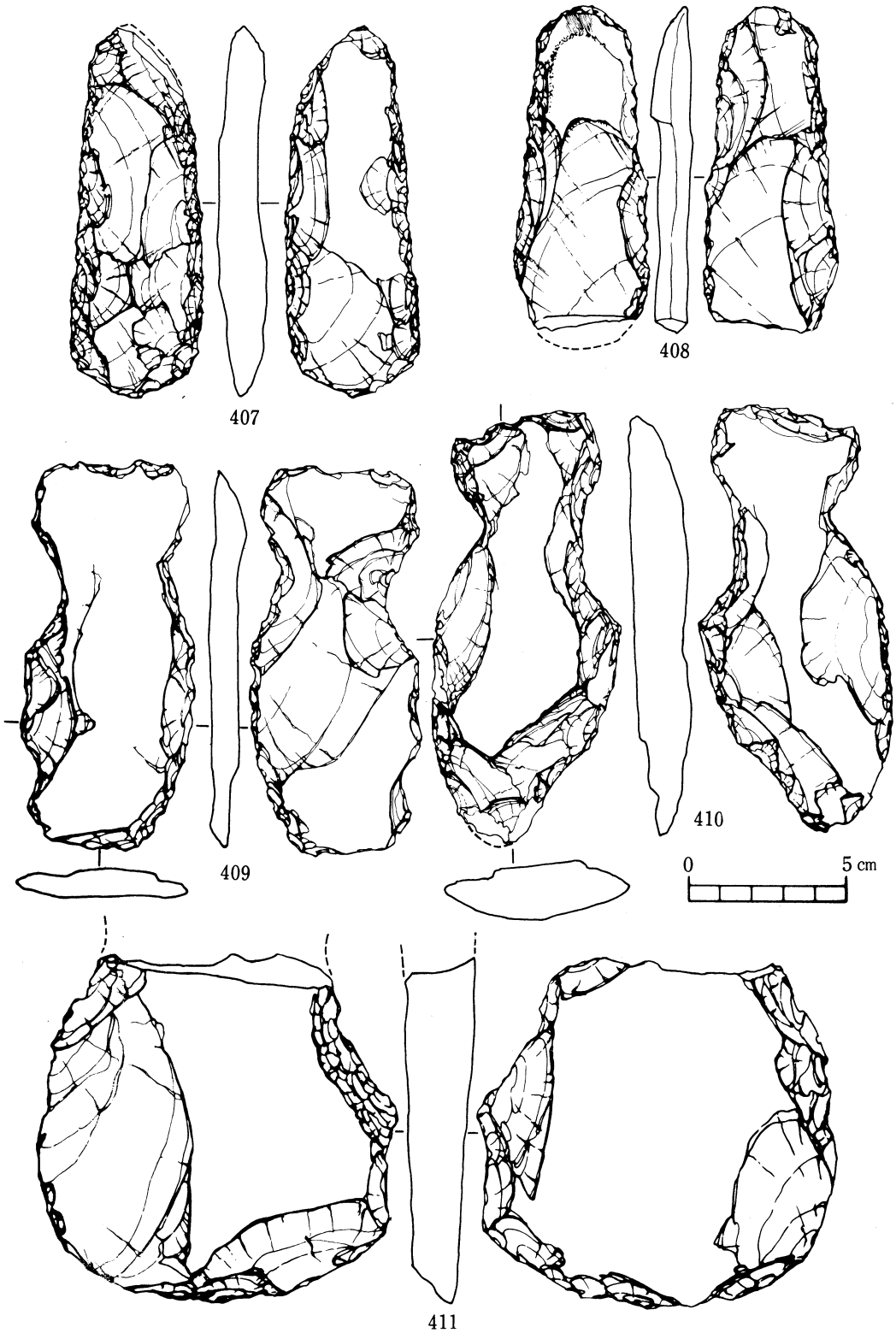
上原遺跡は昭和52年に確認調査を行ったもので，住居址らしい遺構が認められた。397，398は口縁部が逆L字状に外反し，胴部に三条の三角形貼付突帯を廻らすものである。399は口縁径11.2cm，器高5.5cmを測る小形の鉢形土器である。400は壺形土器の口縁部，401，402は袋状の口縁を呈する壺形土器で，口縁外面に櫛描波状文を施すものである。403は袋状を呈する口縁部で，頸部の突帯及び口縁下位に刻目を施す。404，405は高坏の脚部である。406は口縁径9.1cm器高5.6cmを測る坩形土器，底部に径1.4cm，厚さ0.3cmの突起を有する。397，398は弥生時代中期中葉，399～406は古墳時代のものと思われる。



第39図　上原遺跡出土遺物

下永山遺跡（7，第40図）

407～411は下永山遺跡より表面採集された石器である。いずれも扁平な打製石器である。407，408は短冊状，409，410は抉りを有するもので，いわゆる有肩石斧と呼ばれるもの，411は一部を欠くが，やや大きめの石器である。下永山遺跡では，弥生式土器片等が認められているが，この資料は表面採集品のため時期は不明である。



第40図　下 永 山 遺 跡 採 集 石 器

番号	遺跡名	所在地	備考
1	東泊	有明東泊	タタラ跡(江戸)
2	乙子神社境内	〃 乙子	縄文
3	仮屋	〃 仮屋	〃
4	床滑A	〃 床滑	〃・弥生
5	床滑B	〃 床滑	〃
6	大戸原	新富大戸原	弥生・古墳
7	下永山	新富永山	〃 〃
8	中村園	〃 中村園	〃
9	長珠庵	〃 長珠庵	土師
10	川路	〃 川路	弥生・土師
11	山下	後田山下	〃 〃
12	銭亀	〃 銭亀	〃
13	小牟田上	〃 小牟田上	〃・土師
14	稲荷岡	〃 稲荷岡	〃
15	長谷	波見荒瀬長谷	縄文 弥生・土師
16	山下ノ上	後田山下ノ上	縄文
17	瀬戸宇治A	〃 瀬戸宇治	〃
18	道中原	〃 道中原	〃・弥生 土師
19	片野	〃 川上片野	縄文・弥生
20	折生野	〃 川上折生野	〃
21	奥野	〃 岩屋奥野	〃
22	花牟礼	新富花牟礼	弥生
23	上永山	〃 上永山	〃
24	芋迫	新富花牟礼芋迫	〃・土師
25	上西方	前田上西方	〃・古墳
26	訪諏ノ上	前田上西方訪諏ノ上	〃・土師
27	寺ノ上	〃 寺ノ上	〃 〃
28	軍原	前田上大脇軍原	〃・古墳
29	滝ノ上	〃 〃 滝ノ上	〃・土師
30	本城入口	〃 本城入口	〃
31	船着	〃 川上船着	〃
32	安田	〃 本城安田	〃
33	天神原	宮下天神原	〃・古墳

番号	遺跡名	所在地	備考
34	今市牧	富山今市牧	弥生
35	前畑	〃 前畑	〃
36	大塚原	〃 大塚原	〃
37	瀬戸宇治原	後田瀬戸宇治原	〃
38	中原	後田中原	〃
39	内園	前田三反内園	〃
40	下住	前田下住	〃
41	東横間	新富東横間	〃・古墳
42	大窪	後田大窪	〃
43	鳥越	〃 鳥越	〃・土師
44	堀込	野崎塚崎堀込	〃・土師
45	原	野崎塚崎原	〃・古墳
46	上ノ原	前田上ノ原	〃・古墳
47	堂園の上	前田堂園の上	〃
48	岩屋	川上岩屋	〃
49	湯の谷	〃 湯の谷	〃
50	瀬戸口原	後田白坂瀬戸口原	〃・古墳
51	永野原	後田永野原	〃・土師
52	論地原	〃 論地原	〃
53	塚崎	野崎塚原	〃・古墳
54	津曲	〃 津曲	〃 〃
55	横溝	野崎和田横溝	〃
56	和田城	野崎和田城	〃・土師
57	瀬戸宇治B	後田瀬戸宇治	縄文・弥生
58	安野	野崎安野	弥生
59	西大園	〃 西大園	〃
60	平後園	波見平後園	〃・須恵
61	松山	〃 荒瀬松山	〃・土師
62	波見公園(裏)	〃 公園裏	〃
63	稲村高塚	後田稲村高塚	〃
64	上ノ原遺跡	前田上ノ原	弥生 地下式横穴
65	横間遺跡	新富横間道路下	〃
66	白坂	後田白坂	〃

番号	遺跡名	所在地	備考
67	前田下西	前田下西方	弥生式横穴
68	前田西町西宮神社	前田西町西宮神社	〃
69	今市	富山今市	古墳
70	辺塚古墳群	〃 辺塚	古墳群
71	宮ノ上 〃	宮下宮ノ上	古墳群
72	イヤの前 〃	宮下イヤの前	古墳
73	辻 〃	富山辻	古墳群
74	西横間	新富横間	〃
75	丸岡古墳	新富米山寺墓地	〃
76	北後田古墳	後田稲村	〃
77	塚崎古墳	野崎堀込	〃
78	竹田神社	前田上西方日新	

番号	遺跡名	所在地	備考
79	盛光寺墓地	前田上西方日新	
80	薬師寺跡	富山辻	
81	道隆寺跡	本城	
82	盛光寺跡	前田上西方	
83	高山城跡	新富本城	
84	和田城跡	野崎和田	
85	検見崎城跡	後田検見崎	
86	弓張城跡	新富城山	
87	富山城跡	富山	
88	検見崎古墳	後田検見崎	古墳
89	上厚	野崎上厚	弥生・古墳
90	本城磨崖仏	本城	

註6） 戸崎勝洋・立神次郎「小山遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 鹿児島県教育委員会 1982年

7） 河口貞徳「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財調査報告書第7集』，鹿児島県教育委員会，1960年。
河口貞徳「山ノ口遺跡」『立正考古第21号』，立正大学考古学研究会，1962年。

8） 松本健郎・横尾泰宏・勢田広行「生産遺跡基本調査報告書II」『熊本県文化財調査報告第48集』，熊本県教育委員会，1980年。

9） 立神次郎・中村耕治「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書13』，鹿児島県教育委員会，1980年。

10） 長野真一・峯崎幸清「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書23』，鹿児島県教育委員会，1982年。

13） 飯盛山古墳は，昭和10年頃に瀬戸口望によって，その存在が知られていた。その後，墳丘上に町営の国民宿舎ダグリ荘が建設され，墳丘は破壊されている。主体部が宿舎の玄関近くとされている。

志布志町内の遺跡・遺物

志布志町は曽於郡の東南部に位置し，北東から東にかけて宮崎県の都城市，串間市と県境をなしている。また，末吉町，松山町，有明町と隣接する。北部は標高200m以上の山地がありそこから，前川・安楽川・大矢取川が流れ出て多くの浸食谷を形成する。山地の南側には独立した火山灰台地が広がり，縄文時代の遺跡も数多く存在する。志布志町においては，縄文時代を中心に数多くの遺跡が知られている。これらの多くの遺跡は，瀬戸口望の長年の研究によって発見され，今回の調査でも基礎資料として活かされている。古墳時代においても県内で最も古いものとされている飯盛山古墳(註13)も所存している。1～71は近年の調査により知られた遺跡，72～178は遺跡地名表より抜き出した遺跡である。

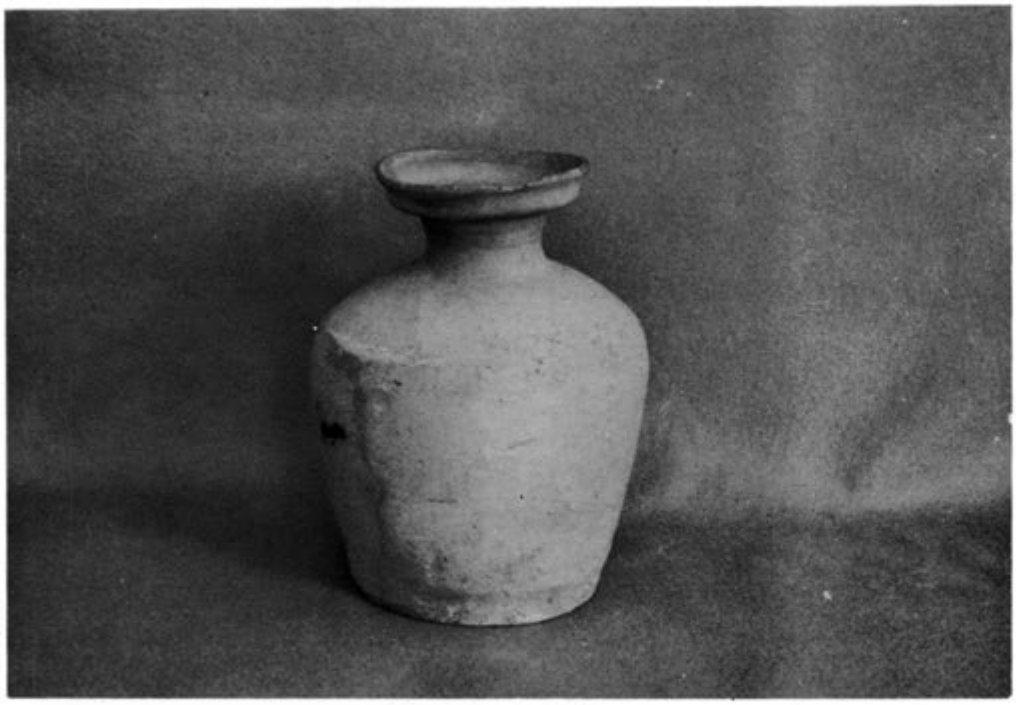
番号	遺跡名	所在地	備考
1	牧原	田之浦牧原	縄文(轟)
2	内門	〃 内門	縄文
3	白木原	〃 白木原	縄文(押型文)
4	大長野	〃 大長野	縄文(押型文)
5	平山	〃 平山	弥生
6	宮谷口	〃 宮谷口	縄文
7	宮ヶ中	〃 宮ヶ中	弥生
8	本村	〃 本村	縄文
9	下原	〃 下原	弥生
10	小牧	〃 小牧	縄文
11	蔵園	〃 蔵園	縄文(住居址)
12	中迫	〃 中迫	縄文
13	東黒土田	内ノ倉東黒土田	縄文
14	土光A	〃 土光	縄文
15	土光B	〃 土光	縄文
16	上原	〃 上原	縄文
17	中須	〃 中須	縄文
18	森山	〃 森山	弥生
19	西中畑	〃 西中畑	縄文
20	平原A	〃 平原・西畑	弥生
21	平原B	〃 平原・上原	弥生
22	上原	〃 上原	弥生
23	樽野	〃 樽野	弥生・縄文
24	下原A	〃 下原	縄文
25	下原B	内之倉下原	弥生・縄文
26	長尾	〃 長尾・横尾・樽野	縄文
27	横尾A	〃 横尾	縄文
28	横尾B	〃 横尾	縄文
29	札建	〃 札建	弥生
30	蓑輪	〃 蓑輪・札建	縄文・弥生
31	柳	安楽・人足・柳	弥生・縄文
32	上重	〃 上重	縄文
33	四反田	〃 四反田	弥生
34	高牧	〃 高牧	弥生
35	二重堀	〃 二重堀	弥生
36	権現原	〃 権現原	弥生
37	別府	〃 別府	縄文
38	水ヶ迫	〃 水ヶ迫	弥生・土師
39	大西	志布志大西	縄文
40	向川原	帖向川原	縄文
41	野首A	〃 内城・野首	弥生・縄文
42	野首B	〃 西中尾・野首	縄文
43	西中尾	〃 西中尾	縄文
44	油田	〃 油田・飛渡	弥生・縄文
45	堂迫	〃 堂迫	弥生・縄文
46	島廻	〃 島廻	弥生
47	下牧	〃 下牧	弥生・縄文
48	白木牟田	〃 白木牟田	弥生・縄文

番号	遺跡名	所在地	備考
49	上牧	帖上牧	縄文
50	中原	帖中原	縄文
51	井手元	帖井手元・中原	縄文
52	上佐野原	帖上佐原原	弥生
53	出口	帖出ノ口	縄文
54	東原	帖東原	縄文
55	堂ノ下	帖堂ノ下	縄文
56	家野	帖家野	縄文
57	松崎	帖松崎家野	縄文
58	西原	帖西原・二反野	縄文
59	牧	帖牧	弥生・縄文
60	川平	帖川平	縄文
61	下迫	帖下迫・中迫	縄文
62	下佐野原	帖下佐野原	縄文
63	大二反野	帖大二反野・二反野	弥生・縄文
64	下田	帖下田	縄文
65	八反田	帖八反田	縄文
66	柳元	帖柳元	縄文・弥生
67	下原	帖下原	弥生
68	前谷	帖前原	縄文
69	柳ノ下	帖柳ノ下	縄文
70	山下	帖山下	弥生
71	深迫	夏井深迫・土光・西俣	弥生・縄文
72	上門A	安楽上門	縄文・弥生
73	上門B	〃 〃	縄文
74	上門C	〃 〃	縄文
75	上門D	〃 〃	縄文
76	大迫	〃 大迫	縄文・弥生
77	石踊	帖石踊	縄文・弥生
78	野首	帖野首	縄文・弥生
79	柳井谷	帖柳井谷	縄文
80	道重	内之倉弓場迫2280	縄文
81			

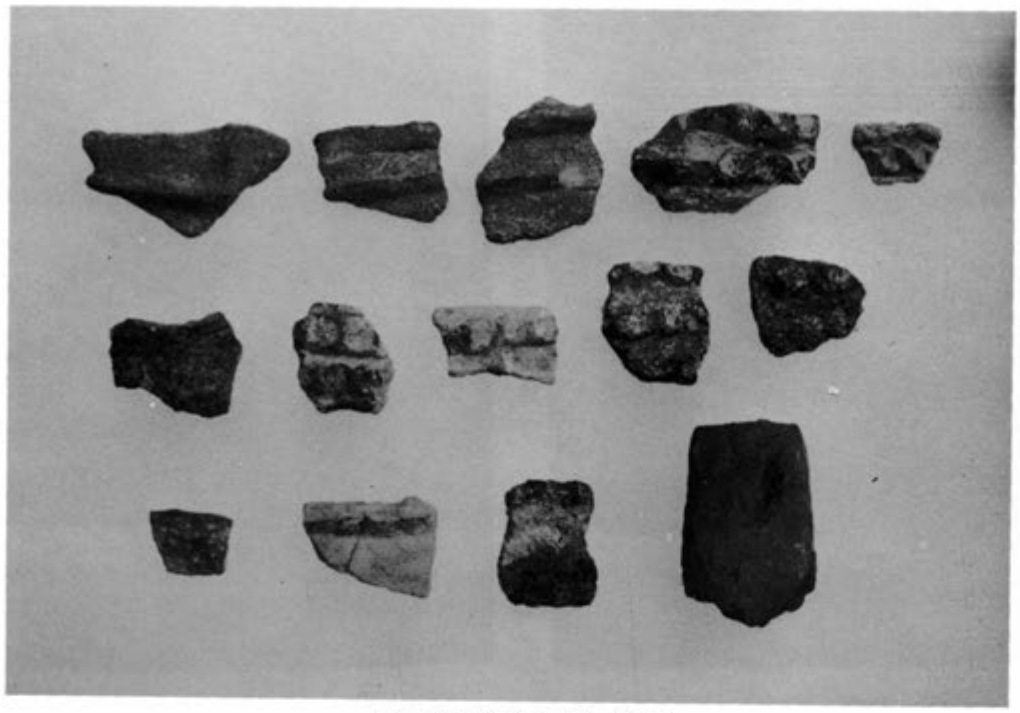
番号	遺跡名	所在地	備考
82	ミゾレ谷	夏井ミゾレ谷	縄文
83	下牧	帖下牧	縄文・弥生
84	ウドン上	帖ウドン上	縄文
85	吉原	田之浦吉原	縄文
86	牧野	田之浦牧野	縄文・弥生
87	出口	内之倉出口	縄文・弥生
88	立花迫	内之倉立花迫	縄文
89	田床	内之倉潤野田床	縄文
90	大川内	内之倉大川内	縄文
91	天提	帖松崎 10767 10290	縄文・弥生
92	横峰	帖横峰	縄文・弥生
93	片野洞穴	内之倉片野	縄文・弥生
94	後谷	内之倉後谷	縄文・弥生
95	山ノ上	帖別府 8473	縄文
96	小淵	帖小淵 6423	縄文・弥生
97	倉野	田之浦吉原1171	縄文
98	板山	田之浦板山 116	縄文
99	白木八重	田之浦白木八重1039	縄文
100	大越	田之浦宮地原348	縄文・弥生
101	小牧	田之浦小牧122	縄文
102	小迫	田之浦小迫	縄文・弥生
103	山久保B	田之浦山久保	縄文
104	宮前	内之倉竹下6661-5	縄文・弥生
105	姥ヶ谷	内之倉姥ヶ谷5546	縄文・弥生
106	東黒土田A	内之倉黒土田	縄文
107	東黒土田B	内之倉黒土田	縄文
108	東黒土田C	内之倉黒土田	縄文・弥生
109	井手平	内之倉井手平	縄文
110	池野	内之倉池野	縄文
111	倉園A	内之倉池野	縄文
112	倉園B	内之倉池野	縄文
113	十文字	内之倉十文字原4081	縄文
114	浜場	内之倉片野	縄文

番号	遺跡名	所在地	備考
115	出水	内之倉前畑2928	縄文
116	平原	内之倉平原	縄文
117	山裾	内之倉山裾	縄文
118	今別府	内之倉今別府	縄文
119	上樽野	内之倉上樽野	縄文
120	橋之口	内之倉橋之口460 467	縄文
121	樽之口	内之倉樽野717	
122	鎌石橋	帖鎌石	縄文
123	鎌石	〃	縄文・弥生
124	二反野	帖二反野	縄文・弥生
125	坂之上	帖坂之上	縄文
126	野首橋	帖大性院	縄文
127	夏井浜	夏井地蔵下	縄文
128	上ノ園	夏井上ノ園	縄文
129	曲瀬	安楽中原	縄文・弥生
130	小瀬A	安楽小瀬4084	縄文
131	中原	安楽中原4712-6	縄文
132	小瀬B	安楽小瀬	縄文
133	百堂穴	安楽岩戸	縄文・弥生
134	宮脇	安楽宮脇1106-1	縄文・弥生
135	安・良	安楽安良	縄文・弥生
136	鳥井下	安楽鳥井下	縄文
137	船磯	安楽船磯	縄文
138	前之段	帖前之段	縄文
139	八郎ヶ野B	内之倉八郎一野	縄文・弥生
140	毛穴野	帖毛穴野	弥生
141	六月坂	帖六月坂	弥生・須恵器・土師器
142	宮馬場	安楽宮馬場	弥生
143	水ヶ迫	安楽水ヶ迫	弥生
144	道悦	安楽道悦	弥生
145	田吹野	田之浦田吹野	弥生
146	夏井	夏井外牧	弥生
147	高吉	安楽高吉	弥生

番号	遺跡名	所在地	備考
148	佐野	帖帖野	弥生
149	上田屋敷	帖上田屋敷	弥生
150	外ノ牧A	帖外ノ牧	弥生
151	打出ヶ浜	夏井打出ヶ浜	弥生
152	平城	安楽平城	弥生
153	一丁田	安楽一丁田	須恵・土師器
154	六月坂土坂	安楽六月坂	横穴墓
155	山宮土坂	安楽宮馬場	歴史
156	夏井古墳	夏井堀之内	古墳
157	飯盛山古墳	夏井ダグリ岬	古墳
158	批挪島	夏井批挪島	須恵器 土師器
159	桜山	安楽桜山	土師器
160	市坂	帖市坂	須恵器
161	頴娃郷	安楽頴娃郷	須恵器 土師器
162	向江	安楽向江	土師器
163	外ノ牧B	帖外ノ牧	土師器
164	和田	内之倉和田	弥生
165	昆砂ヶ野	内之倉昆砂ヶ野	弥生
166	山宮神社	安楽宮馬場	
167	宝満寺址	帖向川原	
168	即山院跡	帖上大黒	
169	松尾城跡	帖	
170	志布志城跡		
171	安楽城跡		
172	高城跡		
173	大慈寺墓地	帖大黒町	
174	愛甲善春墓	帖小西	
175	肝付兼墓		
176	山久保A	田ノ浦山久保	縄文
177	八郎ヶ野A	内ノ倉八郎ヶ野	縄文

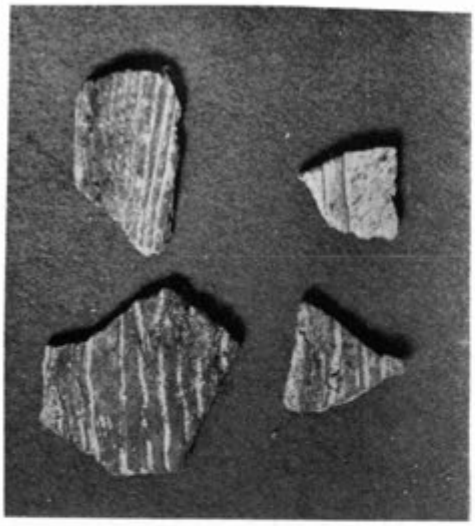


① 笑喜遺跡（骨壺）



② 大泊貝塚（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類）

図版２



Ⅴ層出土土器

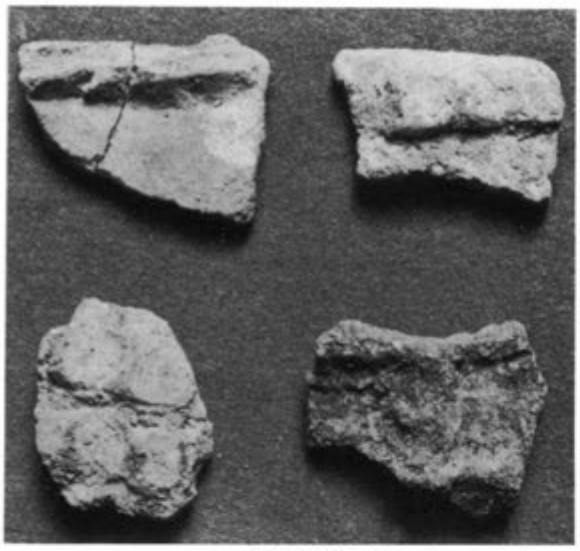
Ⅸ層出土土器

Ⅴ層中検出集石

Ⅸ層中検出集石

鹿屋市伊敷遺跡

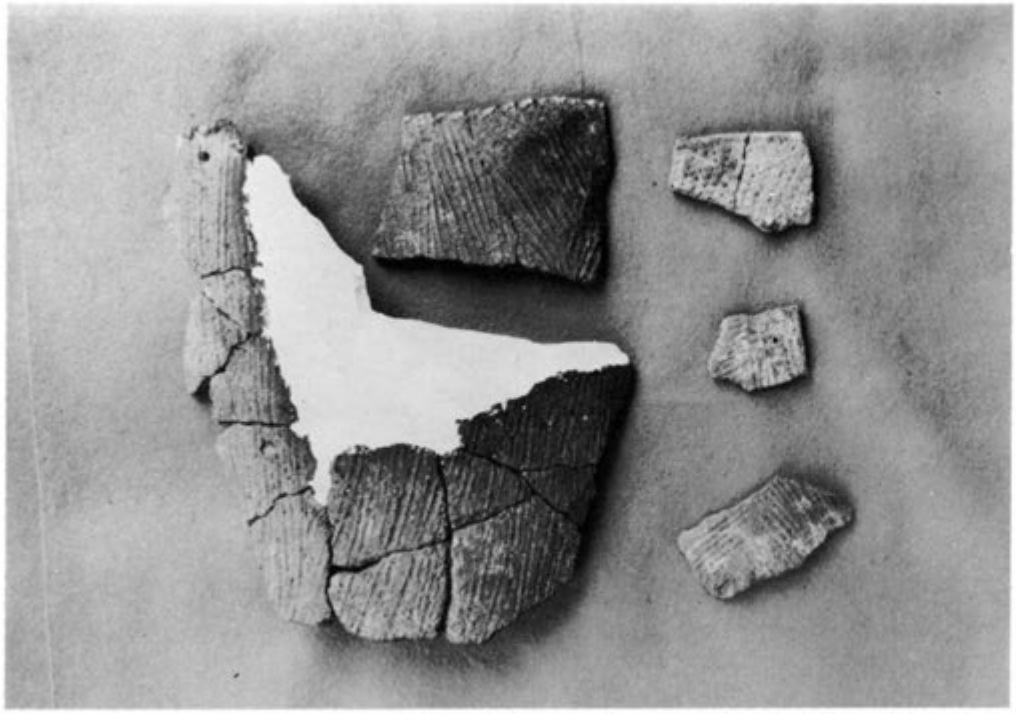
V層検出集石及び土器



IX層出土石器

IX層出土土器

図版４



①串良町上小牧遺跡出土土器

②高山町塚崎遺跡出土土器